

Lib.

京都産業大学図書館報

v.34, 増刊号 (Dec. 14, 2007)

発表！！

第3回京都産業大学図書館 書評大賞

| | |
|-------------|--------|
| 入賞者一覧 | 2 |
| 選考経過と全体講評 | 3 |
| 入賞作品ならびに講評 | |
| <大賞> | 4 5 |
| <優秀賞> | 6 - 15 |
| <佳作> | 16 35 |
| アンケート・統計・概要 | 36 40 |

第3回京都産業大学図書館書評大賞

第3回京都産業大学図書館書評大賞には218篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り受賞者が決定しましたので発表します。

| 大 賞 | |
|-----------------------------------|------------------|
| 氏 名 (所 属) | 書 評 対 象 図 書 |
| おくで えり 奥出 江里 (経営学部経営学科 3年次生) | 『沈まぬ太陽 3: 御巣鷹山篇』 |

| 優 秀 賞 | |
|--------------------------------------|-------------------|
| かわうち そうしん 河内 聡伸 (法学部法律学科 3年次生) | 『巷説百物語』 |
| きたじま ゆうき 北島 佑樹 (法学部法律学科 3年次生) | 『人は見た目が9割』 |
| そのだ ひろみ 園田 裕美 (文化学部国際文化学科 3年次生) | 『4TEEN (フォーティーン)』 |
| ふくい ゆき 福井 悠紀 (文化学部国際文化学科 2年次生) | 『夢の靴職人: フェラガモ自伝』 |
| ふじい まな 藤井 真奈 (文化学部国際文化学科 3年次生) | 『機関車先生』 |

| 佳 作 | |
|---|----------------------------|
| うちだ たかこ 内田 貴子 (外国語学部 ^ト 伊語学科 4年次生) | 『図説 50年後の日本』 |
| うめお しんたろう 梅尾 真太郎 (文化学部国際文化学科 3年次生) | 『安心社会から信頼社会へ: 日本型システムの行方』 |
| おぐら まさひろ 小倉 匡弘 (経営学部経営学科 3年次生) | 『おまけより割引してほしい: 値ごろ感の経済心理学』 |
| かわむら しょうた 川村 翔太 (経営学部経営学科 4年次生) | 『アイデアの作り方』 |
| すぎもと みゆき 杉本 美幸 (外国語学部中国語学科 2年次生) | 『橋本治の古事記』 |
| すずき なつみ 鈴木 夏海 (法学部法律学科 3年次生) | 『トトロの住む家』 |
| せじま まさひろ 瀬島 正大 (理学部数理科学科 3年次生) | 『こころ』 |
| なかむら ゆうみ 中村 優美 (文化学部国際文化学科 3年次生) | 『京都読書空間』 |
| もりしま しほ 森島 志帆 (法学部法律学科 3年次生) | 『西の魔女が死んだ』 |
| やじま みお 矢島 美緒 (経営学部経営学科 2年次生) | 『きらきらひかる』 |

選考経過と全体講評

図書館長 こばやし かずひこ 小林 一彦

第3回目をむかえた図書館書評大賞には、218篇もの応募がありました。第1回(125篇)、第2回(153篇)をはるかに上回る数字です。

その選考には、図書館長、教員委員4名、職員委員4名の計9名で構成される、図書館書評大賞選考委員会があたりました。第1回の委員会は4月25日(水)に開催、募集要項や情宣活動、選考過程等々、細部にいたるあれこれを取り決めました。6月20日(水)には、昨年の白岩玄氏に続き、『介護入門』で第131回芥川賞を受賞されたモブ・ノリオ氏を招いての講演会を開催したのをはじめ、ホームページやチラシで学内に告知をはかり、さらにKBSラジオ「里見まさとのSCAN KYOTO」などの媒体を通じても積極的な情宣を行いました。

応募作品の選考は、本人に関わるすべての情報を伏せ、最後まで受付番号のみでなされます。まず、図書館の職員委員4名を中心に、予備選考が行われました。文字数の過多・過少、また対象作品を図書館が所蔵しているか否か、全218篇がふるいに掛けられます。その結果は直ちに10月5日(金)の第2回選考委員会に報告され、協議の上、28篇が脱落し、1次選考の対象作品190篇が確定しました。その190篇をほぼ4等分し、教員委員と職員委員の2名一組が、相談せずに各自で精読し、採点結果を持ち寄りそれぞれの評価をつき合わせて、2次選考へと進む作品が精選されるのです。6段階に採点された作品は、まず上位2段階の20篇が自動的に2次選考へと進みます。さらに3～4段階のボーダー50篇を対象に、1次選考に携わらなかった残りの1名の委員が選考結果を知らされない状態で別途評価を行い、その結果32篇が追加され、2次選考に進む計52篇が出そろいました。2次選考では、1次選考の結果を白紙に戻し、9名の全委員が全52篇をあらためて精読、日本語表現・文体・構成・読解力・展開の仕方・独自の視点・論理的整合性・的確な意見かどうか

等々、細部にわたって点数を付けました。こうして各委員から提出された評点を合計し、点数の高い順に一覧リストが作成されました。11月9日(金)の第3回選考委員会では、このリストをもとに、上位16篇が入選作としてふさわしいかどうか、またこれ以外にも見落としや漏れがないか、慎重に討議が繰り返されました。念のため、各作品ごとに最高点と最低点をカットした一覧表も別に作成されましたが、順位に変動はありませんでした。大賞・優秀賞・佳作・選外の境界線上では、その場で作品の読み直しが行われるなど、激論も闘わされました。如上の厳正な選考を経て、その結果、選考委員による採点合計の順位通り、大賞以下の受賞作が決定されるに至ったのです。

選考を振り返ってみると、今年の顕著な特徴として、書評の体裁をなしていない、授業の課題レポートのような作品が一部で見られたことがあげられます。もちろん、上位の作品は、文章の破綻も少なく、全体の構成もすぐれていました。受賞者の諸君には、心よりおめでとうを申し上げます。しかし、欲を言えば、もっと高みを目指して欲しい、と思います。自身の体験に引き付けて書くことは結構ですが、書評とは感想文ではありません。その書物の価値を客観的に評価するという強い意志が必要です。作品の内部に深く没入する、その一方で、作品を離れ冷静な立場から批判批評する、二つの態度が求められることとなります。次の第4回には、ぜひ、そのような本格的な書評が現れてくることを期待したいと思います。

末筆になりましたが、授業や研究活動でお忙しい中、長期間にわたり選考に従事していただきました、箕輪先生(経営)・日渡先生(法)・安田先生(外)・藤井先生(工)・天笠・近江・中上・真部の図書館職員の皆様、協賛いただいた丸善株式会社・株式会社紀伊國屋書店・株式会社キャリアパワー・雄松堂京都株式会社の各位に、心より御礼申し上げます。



大賞

おくでえり
奥出 江里



書名：『沈まぬ太陽（3）御巣鷹山編』

著者：山崎豊子

出版社・出版年：新潮社，2001

本書は1985年8月12日、日本航空のジャンボ機123便が群馬県御巣鷹山の尾根に墜落し、乗員乗客520名が命を落とした事故を基に書かれたものである。ここには著者の「事故を風化させてはいけない」という思いがこめられている。また本書は著者の感情が一切含まれておらず、事故の様子や関係者の感情などが淡々と客観的に、また冷静に描かれているのだが、それがかえってリアルで生々しく、私たちに現実を突きつけてくるように感じられた。

本書を読むとあまりの悲惨さに「本当にこんな事故があったのか、これは実は全てフィクションなのではないか」と疑いたくなる。もちろん、この事故をリアルタイムで知っている者からすればフィクションなどでないことはわかりきったことであろう。しかし私と同じような年代の者はこの事故は生まれる前、もしくは物心つく前の出来事である。おそらくは多くの者が追悼番組などで目にしたことがある、という程度であろう。そのため、本書の内容、特に事故現場の様子や遺体検視の様子などのあまりのむごさ、残酷さに、全てがフィクションなのではないかと思わずにはいられないのである。それほど衝撃的で戦慄な事故の様子が本書には描かれている。それは著者の徹底した取材の賜物であろう。本書の全てが事実というわけではないであろう。しかし本書のあまりにも悲惨な現場状況にきっと何度も読む手が止まってしまうのではなかろうか。実際に体験した者にしかわからないことは多いであろう。しかし実際に体験していない人でも本書を読むことでその迫真の文章から悲しみ、怒り、そしてそれを越えて強く生きる人間の姿に涙することであろう。

さて、本書の主人公は恩地という航空会社に勤めるサラリーマンである。事故当時、恩地は十年もの長きにわたった海外左遷に耐えたあと、日本に戻ってきたばかりのところであった。そして事故後は、事故現場に赴き遺族のお世話を命じられたり、遺族と補償金の交渉をさせられたりする。ここで私が注目したいのは、彼が主人公らしくないということである。主人公らしくない、というのは山崎豊子作品での他の主人公、例えば『白い巨塔』の財前教授や、『華麗なる一族』での万俵鉄平と比べてのことである。恩地は財前や万俵鉄平に比べ、どうも存在感が薄いように感じてならない。これは恩地が二人と比べエリートでもないし金持ちでもないから、という理由からではないように思う。私は恩地に存在感があまりないのは、恩地が等身大のサラリーマンであるからではないかと考える。絶対的な主人公のオーラというか、存在感が恩地にはない。だが、代わりに恩地には他作品の主人公と比べ親しみやすさがあるように思う。親しみやすさ、という表現は正しくないかも

しれないが、遺族と会社の間で迷いながらも職務を全うしようとするさまや、娘の結婚話への対応など、そんな恩地の姿が読者にとっては入りやすく、また親しみやすいのではないだろうか。恩地はやはり主人公である。存在感はなくとも、恩地は山崎豊子の他の作品での主人公とは全く違う魅力を持っているのだ。

また、本書を読むことで私たちは「何が大切なのか」、「何が正しいのか」を何度も何度も考えさせられるのではなからうか。本書では航空業界を題材にしているが、加害者としての企業と被害者、それを取り巻く政府の官僚や警察、記者、会社の社員などの行動・判断というか、人間同士のぶつかり合いは別段航空業界に限られたことではない。これはどんな業界でも起こりうることなのである。しかしそういった想定外の出来事が起こったときに人間がどう行動するかということが本書には細かく記されている。人間の醜さや汚さがこれでもかとはばかりに散りばめられている。(話が戻るが、そういった人間の中で苦悩しながらも遺族のためにと奮闘する恩地の姿が主人公として読者に支持を得ているのであろう。) 本書に描かれる会社(加害者)と被害者の間で揺れる社員、マニュアル通りにしか動かず会社の駒にすぎない社員、ここぞとばかりに叩くマスコミ関係者、都合が悪くなると手のひらを返す政府・官僚、そして自分の体裁しか気にしない社長の姿。読み手はそれらと恩地の姿を通じてその時何が一番大切なのか、何が最善の行動なのかを読み進めるごとに考えさせられることであらう。

最後になるが、本書で描かれた様子がどうしてもJRの尼崎脱線事故の様子と重なってしまうのは私だけではなからう。20年もたつてなお、企業は同じことを繰り返しているように思えてならない。「何が大切なのか」。それをもう一度、企業が、日本が考え直さなければならぬのではないか。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 日渡 紀夫

優れた書評とは、その読み手に、その対象となった本を手にとって読んでみたい、と思わせるものである。そのための手法としては、本の内容を要領よく伝えるとか、読後の感動を率直に述べるとか、読了して考えさせられたことを語るとか、などの方法が考えられる。しかし、それだけでは、要約とか、感想文とか、懸賞論文とか、になってしまい、「書評」とは呼べないものになってしまう。

その点、本書評は、以下で述べるように、「書評」となっており、そのことが選考委員の幅広い支持を得た原因である。まず冒頭で、対象図書の内容を簡単に伝えており、読み手に安心感を与える。次いで前半では、読後の感想を述べており、評者の感動が伝わる。そして中盤では、ドラマ化されて有名な、著者の他の作品の、主人公と、対象図書の主人公を比較しており、著者のファンでない人や本を読まない人の興味もそそっている。更に後半では、読了して考えさせられたこと、本書のテーマ、について語っており、現在の世の中を嘆く人や将来の生き方を模索している人に問題を提起するものである。加えて、上記のような構成(各々の順序や分量)も、読みやすさを増すものであり、このことも選考委員の評価を獲得した原因である。

そのほか、表現も、「であろう」とか「ように思う」とか「ではなからうか」といった婉曲的なものが多く見られ、このことも選考委員の好感を集めた原因である。

ともかく京都産業大学の図書館書評大賞にはふさわしい書評であった。

受賞者から一言



まさか大賞をいただけるとは思っていなかったのでとても驚いています。また、昨年は優秀賞、今年は大賞と、この一年で自分が成長できた事も嬉しく思います。このような素晴らしい賞に選んでいただき、本当にありがとうございました。



優秀賞

かわうち そうしん
河内 聡伸



書名：『巷説百物語』

著者：京極夏彦

出版社・出版年：角川書店，2003

「『巷説百物語』を読んで。」

夏が来ると決まって読みたくなる本がある。夏の真っ昼間の暑い最中に蝉の声を聞きながら汗だくで読むのではなく、日も落ちて暑さが少し和らぎ、蚊とり線香の香りをかきながら畳の上で読みたくなる一冊が本書、『巷説百物語』（著者 京極夏彦）である。高校時代に図書室で本書を見つけ初めて京極夏彦氏を知ったのだが、それ以来夏は京極氏と共に過ごしている。夏の夜というとお化け屋敷・怪談など、背筋がひやっとするものを連想するが、京極氏の作品はお化け、すなわちこの世のものではない存在を取り上げたものが多い。その中でも本書はお化け（本文：もののけ、あやかし）、転じてこの世に存在しない不可思議なものが天こ盛りに出てくる。ならば本書はただのこわいお化けの話なのかと言われると、そうではない。本書はまた別のこわさを持っている。

本書の舞台は江戸時代。山岡百介という諸国の不思議な話・こわい話を収集しながら旅をしている若い作家の視点で描かれている。百介は旅の途中で小股潜りの又市と名の男と出会い、その仲間と共に彼の仕事を手伝うことになる。その仕事というのが壮大な妖怪からくり仕掛けを使ってお上に相談できない類の恨み・かたきを依頼として受け、誰も損をする者が出ず、八方丸く収まるように解決していく。では、人から受けた相談事を請けおって双方が立つように解決するのだから正義かという、必ずしもそうとは言い切れない。彼らは必ずそれ相応の見返りを受け取る。言ってみれば、裏社会の仕事請負人である。又市は仲間も含め、皆正規の職業を持っていない。いわゆる社会のはみ出し者の集まりである。なぜ堅気である百介がそんな彼らを手伝うようになるのか。それは、又市の持つまっすぐな考え方に惹かれたからだろう。

例えば一つの事件が起こった時に、それによって得をする者と被害を受けて損をする者が出たとする。誰かを失った・大切なものを盗られた・自分のエゴのため・人のため・仕方なく・魔がさして、どんな形であれ泣く者がいて笑う者がいる。普通であればその損害を立て直すために、ただ仕返しをすればいいと考えるだろう。やられたならやりかえす。しかし、そうすると今度は仕返しをされた方が辛い目に会う。ましてや恨みをはらすために殺人などを犯してしまったら、仕返しをされた方もする方も一生傷を負って生きていかなければならない。双方が損を受けこそすれ、救われることはない。又市は双方が救われる道、双方が傷つかず生じた損を解消させる方法を考え実行しようとする。そのために用いるのが、妖怪のからくりである。諸国各地には様々なもののけ・怪奇話の言い伝えがあるが、又市はその話になぞらえ、あたかもこの世のものではないものの仕業であるかのように見せかけ、解決していくのである。もちろん実際は又市達の仕業なのだから人の手によるものなのだが、それが妖怪・たたりによるものだと結論づけることでそこに一種の救いが現れる。

「俺達アお上の犬でもねエ。義賊でもねエ。人を裁くとか、悪を討つとかという大義名分たア縁がねエ。悪党だから死んでもいいなソテいううざッテエ小理屈も俺達にヤア関係ねエ」(p.131)

人が人を裁こうとするから傷つくものが生まれる。ならば人ではないものの仕業にすればよい。「人が人を殺し、それを人が裁いてしまえば結局傷つくのは双方だが、裁くのが人を超越した存在となることで気持ちの上で決着をつけることができる。」恨みをはらすために殺人を犯しても何も解決しない。甘いのかも知れない。しかし、その姿勢を貫き通すことで周囲で影響を受けている者はいる。山岡百介は、「素人」という読み手の私達と最も近い立場におり、彼の目を通して又市を見ることで、又市に人間的に惹かれる気持ちに共感しながら読むことができる。

今、私達が生きる現実社会には毎日のように殺人事件が起き、誰かしらが得をし、誰かが泣いている。あちらを立てればこちらが立たず。双方を丸く収めるというのは実際問題簡単にできるものではない。罪を裁く裁判にしても間違いは起こりうるし、長引くこともある。死刑という宣告が下されることもある。絶対に完璧な解決方法はない。けれど、今の社会を生きていく上で罪を犯した時判決を下すには、やはり人が裁くしかない。どうしても公平で正しい判断基準のもとで罪を罰するしかない。又市のような解決は現代社会では不可能なのだ。

私がこの本を読むといつもひやっとするのは、本当に恐ろしいのは妖怪でも幽霊でもなく、人間なのだと気づくからだ。現実社会でも人は生存競争以外の目的で人を殺せてしまい、また、その判決をするのも同じ人でありそこに間違いや損得が生じかねないのだと気づくからだ。人はこわい。そして、

「悲しいやねえ、人ってエのはさあ」(p.511)

しかし、だからこそ守りたいと思うのだろう。人は人を。夏の夜、本書で涼しくなってみてはいかがだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 安田 和彦

書評者の感覚は、京極夏彦氏の著作、いわゆる妖怪時代小説が持つ雰囲気、なぜだか違和感なくなじんでいるのだろう。書評中の表現を借りるならば、書評者が夏の夜に「蚊とり線香の香りをかぎながら畳の上で」小説に読みふける図が容易に想像されるようでもある。

書評は、その感覚を表現した導入部から、対象図書からの引用を交えた要約、読者としての主体的な読みへと展開され、なるほど、途絶えようもない人の世の物語への誘い(いざなひ)になっていると言えよう。

また、夏の夜に誰からともなく導かれた物語の中の世界から、ひとたび目を覚まして現(うつ)つ)に戻れば、そこに物語の中の男や女の視線を投射しようとする気持ちもわからないでもない。

ただ、惜しむらくは、文章として書評者の言わんとすることは読みとれるが、それが的確に伝えきれていないように思える部分が散見する。例えば、物語中の登場人物の内面的感情を描写する部分もそうであろう。また、「現代社会」に生きる一読者としての主観的判断がなされている部分は、はたして、それが著者・京極夏彦氏の意図に迫るものなのか、疑問を抱かせるように思える。

しかし、講評者も「恐ろし」さを秘め、「悲しい」人のやるせなさを、いとおしく思いたくなくなった。

受賞者から一言



優秀賞に選んでいただきありがとうございます。まさかこのような賞を頂けるとは思ってもいなかったのもので、大変驚いています。

これからももっとたくさんの本を読んでいこうと思います。



優秀賞

 きたしま ゆうき
 北島 佑樹


書名：『人は見た目が9割』

著者：竹内一郎

出版社・出版年：新潮社，2005

人を外見で判断してはいけない。この言葉を子どもの頃に親や先生から教えられた人は少なくないはずである。だから、私は人を見た目だけで判断してはいけないと自分に言い聞かせてきたし、相手のことを何も知らないのに見た目だけで判断することは失礼に当たると考えてきた。しかし、実際「人は外見で判断するもの」だからこそ、このような教育が必要だったのであると著者は言う。この著者の言葉を見た瞬間、子どもの頃に教えられてきた内容との間にギャップを感じ、多少の衝撃もあったが、なるほどなぁと感心する気持ちの方が大きかった。そんな私も実際、心の中では駄目なことだと思いつつも、人を見た目で判断することが多い。

アメリカの心理学者アルバート・マレービアン博士の「ノンバーバル・コミュニケーション」の研究で、情報を伝達するために重要なのは顔の表情や声の質、または身だしなみや仕草であり、話す言葉の内容の重要性は7%に過ぎないと紹介されている。やはり、まともな事を主張していても、身だしなみが整っていなければ説得力は愕然と落ちるだろうし、また、内容は薄っぺらでも話し方や身だしなみがしっかりしていたら、それなりの説得力を兼ね備えるだろうと考えられている。そう考えると、討論番組でどっしり落ち着いた感じの人が話すと最もまともなことを言っているように聞こえるのも頷ける。

また、人を見た目で判断している基準として有名であるのが、「顔の形と性格の関係」である。よく「丸顔」の人の特徴として「明るい」「包容力がある」「情に流されやすい」ということが挙げられる。また、「逆三角形」の人の特徴としては、「消極的である」「学者タイプ」「冷たい」といった印象が挙げられる。これはただの先入観であると受け取る人もいるだろうが事実であると考えられているし、私もそう考える。映画やテレビドラマでキャストिंगがなされる場合、俳優の性格などの内面は判断材料にならず、どうしても見た目が判断材料となってくるらしい。実際、私たちが初対面の人と会うときは相手についての情報は乏しい。そんな中で判断材料となるのは、やはり顔の印象を初めとする見た目であり、顔の形と性格の気質を結びつけることは、私たちが長年培ってきた「人」を見極める手段の一つであると考えられる。

また、「色」の判断について興味深いことが述べられていた。「色」には食欲を増進させたり、集中力を促したりする作用があることをご存じであろう。食欲を増進させる色と言えば「赤」である。また、目立つために使われる色でもある。ファーストフード店を見ても、コンビニを見ても「赤」が多く配色されている。視覚的に訴えかけることによって營

業戦略がなされ、見た目で物事を判断する裏付けとなっている。また、別の例として、ある倉庫では仕事の効率を良くするため、荷物の箱の色を黒色から緑色に変えてしまったという。やはり視覚的な問題で、中身は同じでも黒色の箱より緑色の方が軽く見えるため、仕事の効率が良くなったという。

本書を読むまでは、見た目で判断するといったら対象は人であり、人に対してのみ持つ判断基準であると固執した考えを持っていた。しかし、実際には色や香り、そして距離によっても人は感情を左右されることが分かった。本書を読み進めるにつれて、企業戦略に「まんまと乗せられているなあ」と感じることも多々あったが、それと同時に人の心理を捉える戦略に感銘すら覚えた。なんとも面白い本である。

本書は「ノンバーバル・コミュニケーション」についての内容を初めとし、他者やモノに対する判断基準や何の疑問もなく日常行っている事柄を、著者が根底から鋭い視線を持って解き明かしているところが見どころである。また、演出家兼漫画家の著者が、芝居の演出方法や漫画を描く際用いる表現技法を織り交ぜて遂行しているところも、分かりやすく表現されており見どころであるのではないだろうか。そして、何と言っても対人に限らず対物を視野に入れることによって、普段何気なくとってきた行動にはちゃんとした根拠があったという発見に繋がる興味深い一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 箕輪 雅美

本書評の価値は、ベストセラーになった刺激的なタイトルに振り回されることなく、著者の主張を的確に抉り出し、紹介した点にある。

昨今の出版界においては、販売が優先されるために、ときには書籍の内容を必ずしも正確に反映しないタイトルが付けられることも多いと聞く。特に近年多くの出版社が参入し、熾烈な販売競争が展開されている新書にその傾向が強いという。本書などもその典型であろう。

しかし評者の視線は、そのような出版界の不幸な現状に幻惑されることなく、ノンバーバル・コミュニケーションの重要性という著者の真の主張から離れることがない。書評の冒頭において、まず本書の基調低音である「人は外見で判断するもの」という著者の人間観を掴み出しているからこそ、後半において「外見」が人を離れて、モノへと拡張されていくプロセスの意味を正確に読み取ることができるのである。その意味で本書評の真骨頂は、後半の20行にある。

最後に本書評をさらに発展させるための助言を贈ろう。本書評に不足しているのは、批判的に読むという態度である。批判的に読むということは、もちろん著者のあら探しをするということではない。著者を絶対的な存在と仮定し、その主張を鵜呑みにするのではなく、著者を自分と対等な存在と仮定し、ときにはその主張に反論することを意味する。書評とは、著者と評者との間で繰り広げられる知のバトルなのである。そのことに気づいたとき、君の書評は真の意味での書評に進化するのだと思う。

受賞者から一言



今回の書評では、夏休みを充実させようと思い応募しました。とても興味のある本で楽しく読め、感想も書きやすかったです。書評では、良いところはスムーズに書けましたが、悪いところを書くことがとても難しかったです。ですが、今回受賞できて嬉しかったですし、また機会があれば応募したいです。



そのだひろみ
園田 裕美



書名：『4 TEEN (フォーティーン)』

著者：石田衣良

出版社・出版年：新潮社，2005

「14歳を生きる」

14歳のころ、私は何をしていたらう。何を考えていたらう。

毎日が楽しくて仕方がなかった中学生時代。悩みもあつたりしたらうが、学校生活にクラブに遊びに、純粋に「楽しい」を求めていた。本書は、そんな誰もが過ごした14歳という時を舞台にした、石田衣良氏の直木賞受賞作である。

舞台は東京の月島。ナオト、ダイ、ジュン、テツローの4人がこの物語の主人公だ。彼らは本当にどこにでもいるごくごく普通の中学生。学校のテストに悲鳴をあげれば、女の子にドキドキもするし、しょうもない話題で笑ったりもする。だけどそれぞれが悩みも持っていて、一つ一つの経験に何かを感じ成長していく……。14歳という微妙な年齢だからこそ、大人のような考えたものの見方をしない。彼らはいつだって全力で、だからこそ素直に物事を受け止める。ありきたりな言い方かもしれないが、大人になるにつれて失っていく純粋さを、彼らは心に持っているのだ。

そんな彼らの日常をリアルに、そして切なく見せてくれるのは、石田衣良氏の軽快な文章と、彼独特の表現方法だ。クラス替えしたての教室は、「見知らぬジャングル」、真夏の暑いコンクリートの上に佇む人は、「焼けたフライパンの上のポップコーン」といったように、中学生が思いつきそうな、それでいて非常にわかりやすい比喻を用いて風景を描き出している。街並みもそれこそ彼らの視点から見た景色。中学生の目から見れば、西新宿の高層ビルだって『ロード・オブ・ザ・リング』の特撮シーンに見えてしまうのだ。

そして、リズムカルな文章の中にもグッとくるセリフや一説を交えてくるのが石田衣良氏であり、私たちを『4 TEEN』の世界へ引き込んでくれる。

「僕が怖いのは、変わることだ。みんなが変わってしまって、今日ここにこうして4人でのいる時の気持ちを、いつか忘れてしまうことなんだ。」

中学2年生の春休み、4人は「大人の世界をのぞく自転車の旅」を決行する。これは、その最後の夜に、一人ずつ秘密を打ち明けようというときに、主人公テツローが言った言葉だ。そのあとテツローはこう話す。「僕らはいつか大人になる。それって、今この時のことをバカにするときなんじゃないだろうか。だけど、そんな時こそ今日のことを思い出そう。きっと僕たちは今のこの時が頼りになるだろう。」と。

子供のころの思い出は懐かしい。ああ、あのころは良かったな、こんなことがあったな。一人ひとりがみんな何かしら振り返ることのできる出来事を持っている。では、なぜ私た

ちは回想するのか。テツローが言うように、「頼りになる」からではと、私は思う。思い出のなかに浸ってるうちは疲れた今の世界を見なくて済む。それはとても安心できるもので、また、自分の中に元気を分け与えてくれる。楽しかった思い出はそれだけで、心の中を満たしてくれるのだ。だがそれは、逆に綺麗なものしか見えていない世界だったから、ではないだろうか。大人になり、社会に出て私たちの世界は広がる。様々な人に出会い、自分のかかわる世界についての情報が溢れんばかりに入ってくる。時には悲しみと、落胆が入り混じる時もあるだろう。思い出はそんな時の癒しの存在になりえるのだ。

『4 TEEN』。14歳の4人組のキラキラと輝く日々は、私の心の中にも爽やかな風と光を届けてくれた。単純なようで複雑な中学生時代。小学生のように直球過ぎず、高校生ほど大人の世界に足を踏み入れてもいない。だけど、世の中のことは少し知っていて、大人びた考え方をし始める時期。そのころに出会う外の世界というものはとても新鮮で、彼らは現実を受け止めながらも日々を過ごし、大人へと成長していく。それは誰もが通る道であり、嬉しい悲しい以外の感情が最も育つ時だろう。自分には理解しがたい思いが生まれる日や、どうにもできないグルグルとした思春期……。それは、人生の中ではほんの一瞬かもしれないが、とても貴重でかけがえのないもの。それら全てが今の糧になっていることを私たちは忘れてはいけないのだ。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 藤井 宏

講評者はこの作品と書評（の両方）に関しては委員の中で少数派であるようだ。書評者は、2003年第129回直木賞受賞作のこの作品 ひとことで言えば、平成版 トムソーヤ物語を「4人組のきらきら輝く日々は、私の心にも爽やかな風と光を届けてくれた」と評する。だが、この作品が現代の中学2年生を、その“今”をどれだけ描いているのか講評者の目には疑わしく映る。作家の石田衣良の視線はもちろん14歳の中学生のそれではない。例えて言えば将棋のコマのように少年たちを操って石田はお話を創り出しているようである。

たしかに書評者の指摘するように、著者の独特の表現方法の面白さはある。そして主演の4人もなかなかカッコいい中学生である。しかし「4人組のきらきら輝く日々」は講評者には、ガラスのドームの中の中学生のようにみえる。外の世界は芝居の書割のようにドームの外の点景として配されているが、決して現実には中学生の世界には入ってこないし、ここらに入っていることもない。石田衣良は、不治の病におかされ病院を逃げ出したアカサカさんに、「私の先は見えている。医者治療は気休めに振るう暴力と変わらないし、息子たちは廊下で（相続の話で）声を殺して罵り合っている。あそこは私の帰る家ではない」と語らせるが、これは物語を進めるための小道具に過ぎないようだ。作品中の4人の中学生も、（つまり、この作者自身も）書評者も全く反応しているようには見えない。

講評者のわたしには非現実性の方が気になる。まあ、小説だから良しとしましょう。書評者の君も、無理に感動する必要はなさそう。いや、こんなことを言う講評者の方がきらきら輝いていない大人なのか。

受賞者から一言



まさか自分じゃないだろう！と思っていたのですごく驚いています。私は昔から、好きな作品ほど紹介するのが苦手でした。自分の感動を文章や口で表現するのがどうも上手くいかず、今回も四苦八苦したことを覚えています……。ですが今回、『4TEEN』の素晴らしさを自分なりに伝え切れたのだということ、とても嬉しく思います。ありがとうございました。



ふく い ゆ き
福井 悠紀



書名：『夢の靴職人：フェラガモ自伝』

著者：サルヴァトーレ・フェラガモ
堀江瑠璃子 訳

出版社・出版年：文藝春秋，1996

「『夢の靴職人 フェラガモ自伝』を読んで」

サルヴァトーレ・フェラガモ。日本に住んでいても、一度は彼の名前を聞いたことがあるだろう。世界的なファッションブランドであるフェラガモの創始者である彼は、亡くなってから五十年近く経った現在でも、もっとも有名なイタリア人であり続けている。本書はそんな彼の自伝である。私はぜひ女性にこの本を読んでもらいたいと思う。

この本は彼の生まれ故郷であるイタリアのボニート村から始まる。サルヴァトーレは貧しい家の十一人目として生まれた。彼は近所の靴職人にあこがれるが、両親の猛反対にあってしまう。それでもあきらめきれない彼は、妹に洗礼式用の靴を作ってみせたところ、両親は彼の才能に驚き、靴職人になることを許す。彼は村の靴屋やナポリの靴屋で修業をつんだ後、故郷で靴屋を始めるが満足できず、移民をした兄たちを頼って十五歳でアメリカに渡る。そこで彼はハリウッド映画の衣装を担当し、スターの顧客を多数獲得した。その後も彼は足に合った靴の研究を続け、弟の死や自身の大けがを乗り越えて、ついには大学で解剖学を修めた。そのかいもあってイタリアのフィレンツェで開いた「フェラガモ」が大人気となり、一躍世界的な靴のデザイナーとなった。一時は不況のあおりを受けて破産してしまっただが、数年後に復興した。彼は数多くの特許を取得し、そのデザインは今もなお世界中の人々に愛されている。彼の靴は多くの著名人に好まれ、マリリン・モンローやオードリー・ヘップバーン、そしてヒットラーの愛人であるエヴァ・ブラウンまでもが愛用したといわれている。彼は最終的に足を見て触っただけで、その人の体調が分かるようになったという。

本書の特徴として、「正しい靴選び」について、かなりのページをさいているところが挙げられる。サルヴァトーレの持論を要約すると、「人間が立ったとき、全体重は土踏まずにかかる。だから土踏まずと靴底がフィットしないと親指に負担がかかり、歪んで外反母趾になってしまう。」ということだ。そして「ぴったりの靴を履けば、たとえハイヒールでも鉄砲玉のようなスピードで走ることができる」と述べている。そのほかにも靴のサイズのチェック方法がかなり詳しく、親切に説明されている。私が特に女性にこの本を読んでもらいたいと冒頭で述べたのは、正しい靴選びを知ってもらいたいからだ。街を歩いていると、足を引きずっていたり、ひょこひょこと安定の悪い歩きかたをした若い女性をよく見かける。サイズ選びを失敗したのか、醜く変形した靴を履いている女性も多い。しかし、いくら最新のデザインの靴を履いていても、きちんと歩けないと靴としては失格だ。無理

をして履くと靴も足の形も変形してしまい、魅力が半減してしまう。日本は靴の歴史が浅いから、足にあう靴の選び方が知られていないのだろう。しかし、もし外反母趾になってしまっても、足にあった靴を履くともともとのきれいな足にもどるとサルヴァトーレは言っている。ぜひともこの本を読んで正しいサイズの靴を買ってほしいと思う。

そして、サルヴァトーレのデザインした靴がいまだに履かれていることにとっても驚いた。今秋流行るといわれているブーツや、夏の定番であるウエッジソールも彼のデザインだ。ここまでくると、感心を通り越して空恐ろしくなってしまう。流行は繰り返すとよく言われるが、ただアイデアが涸れただけではないか。開拓の余地がないから先人の生み出したものを引っぱり出しているように思える。そう考えると、何かを創り出していく職業の人は大変なのだろうと思う。

本書のおかげで、私は靴選びの大切さを知った。「たかが靴」などと侮ってはいけない。かつてはサイズの展開が少なく、足の大きな人や幅の狭い人は足にあわない靴を仕方なく履いている人も多かったのだろう。しかし、最近は消費者の要望もあってか、レディースでも 25 センチ以上の靴を置いているデパートが増えている。ぜひこの機会に足を運んでもらいたい。最後になったが、持って生まれたセンスと才能を鼻にかけることなく、地道に研究に取り組んできたサルヴァトーレだからこそ、フェラガモというブランドをここまで大きくすることができたのだと思う。経営者として成功するためのヒントを得たような気がする。経済に興味がある人も興味深く読める一冊だと思う。忘れられない一冊だ。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 安田 和彦

まず、講評者の戸惑い、とでも言うべき感情を述べよう。書評者は「私はぜひ女性にこの本を読んでもらいたいと思う。」と書いているのだが、その書評と対象図書を読み、ここに講評を記している私は、中年男性であり、フェラガモ社の製品は、女性靴はおろか、ネクタイの一本も持っていないのである。なんとも落ち着かないのだ。

とは言え、書評者が言うように、対象図書が世の女性にお薦めの一冊であることに異論はない。それどころか、男性としても、女性の憧れ「フェラガモ」について少しばかり詳しくしておくことは、気の利いたイタリアレストランで女性と食事することがあるとすれば、無駄なことではないだろう。

さて、書評者は、サルヴァトーレ・フェラガモ氏の自伝について、彼の生い立ちを述べる部分、靴職人としての理論と正しい靴選びの方法を述べる部分を分け、生い立ち部分に少し足りない箇所もあるようだが、かなりの確に要約していると言えよう。

ただ、気になったのは、「何かを創り出していく職業の人は大変なのだろうと思う。」の一文である。それは、この自伝の本質は、フェラガモ氏のあくなき創造への情熱の発露にあると思うからである。書評者がそれに気づいていないとは思えない。気づいていればこそ、それをもっと強く伝えられる文章表現が求められるのではないだろうか。

受賞者から一言



自分の文章がどこまで通用するか試してみたくて応募しました。評価していただけたようでとても嬉しいです。来年は小説で応募したいと思います。ありがとうございました。



藤井 真奈



書名：『機関車先生』

著者：伊集院静

出版社・出版年：講談社，1994

「新しい先生は口をきかんのじゃ」

北海道から瀬戸内の葉名島にある生徒数わずか7人の小さな小学校に臨時教師として赴任してきた先生は幼い頃の病気が原因で口がきけない先生だった。

「口をきかん先生……キカンシャセンセイ」

生徒たちは新しい先生をそう名付けた。身体が大きく、強そうな先生。そんな吉岡先生を教室に飾ってあった写真の蒸気機関車 D-51 に喩えて「機関車先生」と呼びはじめる。口がきけない先生がどのようにして子供たちに勉強を教えていくのか。私は興味半分でこの本を手にとった。

口がきけないというハンデを持ちながらも子供たちと交流を深めていく機関車先生。そして、子供たちも最初は驚きを隠せないもののすぐに先生と仲良くなっていく。それはきっと、彼らの心が偏見を持たず純真無垢であったからではないだろうか。一方で、島の大人たちは口がきけない先生に勉強が教えられるはずがない、ととまどう。島民の中には機関車先生に対し冷たい視線をおくる者もいた。しかし、父兄たちは子供たちが機関車先生の授業を熱心に聞き入る姿をみて安心するのである。

そして、話の中で機関車先生と子供たちに次々と事件が降りかかる。生徒の父親の遭難や絶滅したかと思われていた豆狸の発見など、悲しいことや嬉しいこと。これらを乗り越え機関車先生と子供たちはさらに成長し、彼らの絆はより一層深まっていく。

また、物語の中では、葉名島の自然が描写される場面が数多く登場する。目を閉じてみると、まるで葉名島の土地を訪れたかのように景色が浮かんでくる。そんな、葉名島の自然の中で機関車先生と触れ合うことにより、心と身体ともに成長する子供たち。成長したのは子供たちだけでなく機関車先生も同様である。機関車先生もまた、そんな大自然の中で母があまり話さなかった亡くなった父のことや母が島を出て戻りたがらない理由を知るのである。

口がきけない先生ゆえに物語の中で機関車先生の台詞はない。また、機関車先生の心情が描写される場面もほとんどない。そのため、物語を登場人物それぞれの立場に立って読み進めていくことができる。生徒はそれぞれ違う思いや背景を持つものの、機関車先生の存在が彼らの潤滑油となり、さらに互いの交流を深めていく。口がきけなくても心で話したらいい。子供たちは機関車先生と触れ合うことにより言葉では表すことの出来ない心の温かさを学んでいくのである。私はこの本を通して、子供たちと機関車先生の心の豊かさ

というものを感じた。

話の中で「本当に強い人間は決して自分で手を上げないものじゃ。」という校長先生の言葉がある。我慢が出来る本当に強い人間になって欲しい。そうすればこの世から戦争がなくなるだろうという校長先生の思いが強く込められた言葉である。これは私が一番印象に残った場面である。本当は強いはずの機関車先生は生徒の見ていない前で喧嘩を売られて殴られた時、決してやり返さず黙って殴られ続けた。そんな先生の様子を見て子供たちは、機関車先生は弱虫なのだと失望する。しかし、生徒たちは校長先生の言葉を聞いて機関車先生が殴り返さなかった意味を理解するのである。本当の強さや優しさとはなにか、先生は行動で生徒たちに伝えた。「人が憎いとか、悪い奴じゃと決めたところから戦争が始まるんじゃ。」誰かが悪口を言い始めたときに本当にそうなのかをよく考え実行できる人になってほしい。また、やられたらやり返す強さではなく、我慢できる心の強さを持っていれば戦争なんて起こらない。「戦争はな、国と国とが争うように見えるが、本当は人間の心の中からはじまるとるんじゃ」と校長先生は言う。子供時代には理解できたことが大人になってしまふとなぜ分からなくなってしまうのだろうか。また、分かっているもどうして実行に移せないのかと考えさせられた。私は、この本を読んで忘れかけていた子供の心の豊かさ、純粹さを思い出した。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 藤井 宏

著者の伊集院静はきっと、非常に絵画的な“脳”をもった人にちがいない。瀬戸内の小島の段々畑、美しい海のくっきりとした描写だけではなく、物語の一つ一つの場面が絵画的なシーンとして目に浮かぶ。大人も子供たちも土地言葉での会話が美しい。

戦後間もない瀬戸内の小島 - 葉名島のモデルは伊集院の出身地である山口県防府市の野島だという。

「桓武以来」、漁の掟をまもり、寄合い衆を中心とした人口 120 人の島の共同体の生きざまが語られる。

この作品の背景に重低音のように流れているのは、かの戦争に翻弄された島人の人生と、折にふれて校長先生の言葉にも出てくる過去への痛恨の思いである。「吉岡先生。私はね、たくさんの教え子たちを戦争へ行かせたのですよ。戦争がおろかなことは心の半分でもわかっていました。それでもお国のために戦地へ行けとிட்டのです。それは恥というより罪でした。……」伊集院が生まれたのは、敗戦から 5 年後である。講評者と比べて 10 歳も若い伊集院のこのような記述は彼のどのような体験からきているのだろうか。

書評者はこの作品を実に丁寧に紹介している。構成も、文章もわかりやすい。この作品を紹介してくれた書評者に有難うといいたい。

受賞者から一言



優秀賞という素晴らしい賞を頂きありがとうございます。このような賞を頂くのは初めてで、大変嬉しく思います。以前から文章を書くことは苦手だったのですが、今回の受賞を機に自信を持つことができました。



佳作

うち だ た が こ
内田 貴子



書名：『図説 50年後の日本』

著者：東京大学・野村證券共同研究
「未来プロデュースプロジェクト」

出版社・出版年：三笠書房，2006

「50年後の日本 たえば「空中を飛ぶクルマ」が実現！」

「50年後の日本」というタイトルのみを読むと、政治、経済など難しいものだと考えてしまうかもしれないが、この本はそんなに堅苦しいものではない。表紙にはタイトルの他に、成長することになかなか味わえないわくわくする高揚感、そして興味をひく一文が書いてある。

たとえば「空中を飛ぶクルマ」が実現！

この一文を読むだけで好奇心を持ってしまうのは、かつて私たちがアニメの世界の中でしか見られなかったものが50年後には現実のものになるのではないかという期待感である。

この本は、東京大学と野村證券の共同研究「未来プロデュースプロジェクト」による著書で、電子工学、脳研究、航空宇宙工学、液体力学などの最先端分野15人の研究者が「産業・生活・世界」の3つのグループに分かれ、50年後について徹底研究した成果が記されている。研究されていたのが2005年のため、2055年を想定して書かれている。

ところで、今の世界を50年前の人々は考えついただろうか。家電「三種の神器」と呼ばれた皆が憧れた物は今や一家に一台ずつは当たり前になり、電話は手のひらサイズとなり、買い物はクリック一つで済ませることができ、カード1枚がお金の役割を果たし、新幹線で東京 大阪間は3時間ほどで移動可能となった。これらがすべて実現したのは「こうなったらいいなあ」と想像したことからは始まっている。

そして今日、50年後の未来を想像してみると何を思い浮かべるかは十人十色であり、それを「夢物語」だと思う人もいるであろう。しかしこの本は単なる夢物語ではない。様々な分野から考え、技術の発達などを考慮した内容で、「50年後にはこのようなものが開発できる」という裏づけが書いてある。

その内容は空飛ぶクルマ、宇宙空間へ繋がる起動エレベータ、服を入れるとクリーニングするタンスのバイオミストボックス、体調に最適のサプリが自宅で作れる製造器、動物翻訳機、地震の揺れを吸収する「考える土」、植物からできたプラスチックなど、私たちの暮らしがより豊かに、便利に、そして環境にも優しい物が開発可能であるということ、そしてその活用法を読むとわくわく感をさらに高める。

しかし便利になると共に様々な問題も出てくる。例えば「ロボット家庭教師」もその一

つである。50年後には、学習プログラムを理解してその子にあったやり方で指導してくれるロボット家庭教師が、スキンシップやコミュニケーションをはかりながらやる気を出させて、知識の習得を促してくれる。そのロボット家庭教師の課題はロボット開発能力だけでなく、倫理的問題である。子供の知能や考え方を過度にコントロールしてしまう弊害や、親がロボット家庭教師にまかせきりにしてしまうなど、人間関係を学ぶ場を失いかねない。このように開発された後の期待と共に問題も危惧された内容もある。

科学、物理的内容が書いてあると、「文系の自分には読みづらいのでは……」と懸念を抱くかもしれないが心配は無用。聞きなれない専門用語はその文章の下に簡単な説明が書いてあり、要点やキーワードも書いてあるのでとてもわかりやすく、新たな発見もできる。そしてCGで描かれた図説が必ず各章の最初にあるため、文章の内容を無理やり頭の中で思い描く必要はない。未来にあるものだから頭の中に描くことは誠に困難だからこそ、図説と、キーワードで理解していけるのである。

この本を読み終えると、50年後の日本はもっとすごいのではないかと期待する。この本に書かれていること以外にも様々な分野で知識、技術を駆使したものが開発され、人間、動物、植物を取り巻く環境が変わっていくのではないかと想像する。しかしその変化は良い方向だけとは限らない。何か新しい物が産まれるということは何か犠牲になっている可能性もある。便利さだけを追求するのではいけないということも考えさせられる。

50年後の未来にあなたは何を描き、「こうなったらいいなあ」と思いますか。その何気ない気持ちが大きな変化を遂げて、自分達にも世界にも、環境にも何かを与えてくれるかもしれない。やはり未来を想像するのはわくわく、ドキドキして楽しいものである。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 日渡 紀夫

よく読めば、対象図書の趣旨も詳しく伝えているし、「わくわく」という気持ちも各所で述べているし、読了して考えたことも最後に触れているし、冒頭でも後半でもいろいろな人の興味もひこうとしている。このように「書評」としてのポイントを押さえており、このことが選考委員の高い評価につながっている。

また、本の内容についても、ロボット家庭教師の例を挙げて、伝えているが、他の「わくわく」するような開発技術については名前しか挙げていない。これは、読み手に本を手にとらせるための作戦であるのか、それとも、一種の短編集である対象図書のせいなのか。

ともかく京都産業大学の図書館書評大賞の佳作にはふさわしい書評であった。

受賞者から一言



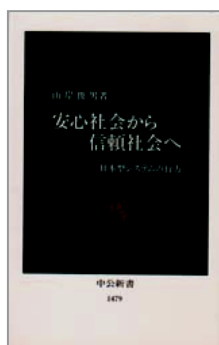
今回最初で最後の応募で入賞できたことがとても嬉しいです。普段本を読むことがあまりなかったので書評大賞のおかげで本を読む機会が増え、本当に感謝しております。四回生のため、もう応募ができないのが残念です。

今回多くの応募の中から選んでいただき本当にありがとうございました。



佳作

梅尾 真太郎



書名：『安心社会から信頼社会へ
：日本型システムの行方』

著者：山岸俊男

出版社・出版年：中央公論新社，1999

「日本型システムの行方」

最近、メディアで「武士道」や「サムライ」といった言葉をよく耳にするようになった気がする。また、『国家の品格』という本がベストセラーになったり、前安倍政権でも「美しい国日本」という言葉をテーマとしていたり、日本全体が過去の日本人の魅力的な性質に自分たちを重ね、自分で自分たちのことをヨイショしているような実感が、近年、私の中で増してきていた。そして同時に、そういったことに対して、なんとなく、嫌悪感を持っている自分がいた。なにが嫌なのだろうと考えてみると、「サムライ魂」や「日本人の品格」といったような日本人の文化的な性質が、まるで自分のDNAの中に刻み込まれてでもいるかのような、全ての日本人が生まれながらにしてそういう性質をすでに持っているかのような、そういった言い回しに違和感を覚えているのかな、と考えついた。今の日本人は、古き善き時代を生きていた日本人ではないし、ましてサムライなんて一人もいないのである。そんな日本人に「サムライ魂」や「日本人の品格」を見出すのは少し無理があるのではないかと。テレビをつけるとコメンテーターが「もっと日本人として誇りを持って……」などと言っているのをよく耳にするが、個人個人の精神に問題の本質を求め、「日本人はダメになってしまった」と嘆いてみても意味がないのではないかと、ひとりでもややと考えていた。そんな中で出会ったのが本書であった。

本書では、今の日本が抱える問題をシステム的な面から見つめ、今までの日本の社会を「安心社会」これから日本が変わっていくであろう社会を「信頼社会」とし、数々の実験に基づき客観的に考察している。

本書の中で紹介されている実験の中で、一つ面白かったものを紹介したい。アメリカ人の学生と日本人の学生とで、どちらの国の学生のほうが一般信頼度（見ず知らずの人を信頼できるかどうかを表す数値）が高いかを調べた実験である。私のイメージでは、アメリカは自分の実力だけで勝ちあがっていく個人主義社会というイメージが大きかった。逆に言えば、簡単に人を信頼すると足をすくわれるような社会で、あまり簡単に人を信頼しないのではないかと、と考えていた。日本は、自分の利益よりみんなの利益を尊重する、と言ったような和を重んじる集団主義的な社会だと考えていたので、一般信頼度も日本のほうが高いだろうと思っていた。ところが実験の結果を見てみると、予想とはまったく逆の結果が出たのである。実験の結果を見ると、日本人はアメリカと比べて他者をあまり信頼しない国民性を持っているということである。本書によれば、その理由は、日本が今まで

安心社会の中で生きていたからだという。

安心社会とは、特定の集団の中で関係を築いていく社会のことである。安心社会の中では、終身雇用制や年功序列制が保障され、会社は特定の取引先と代々取引を重ね、それ以外の外部とは関係を持つ必要がないので、「他人を信頼する」という行為が必要なかった。また、家族や近所の関係でも、安定した関係を築いていたと言えるだろう。しかし今、その安心社会は崩れている、あるいは崩れてしまったとも言えるだろう。就職難やリストラなどで、企業への信頼感は失われてしまっているし、政治や金融、教育に対しても不信が募っている。これまでの安心社会の中から抜け出して、もっと個人間での「信頼」を築いていくことが大切だ、というのが本書の主張である。

文化というのは、外的な環境（システム）によって生み出されるものであって、固定的な考えが遺伝して受け継がれてゆくものではない。古き善き日本人を省みようと言っても、昔の日本のシステムと今の日本のシステムは違うのである。システムが違えば、そこで育つ人間の性質も違って来るだろう。本当に日本のことを考えるなら、日本人は、日本文化はダメになってしまったと嘆くのではなく、日本の変化を客観的に受け止め、ある意味それまでのシステムを壊すことで、日本を守っていく必要があるのではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 箕輪 雅美

本書の著者は、日経経済図書文化賞等を受賞した社会心理学者である。したがって新書という装丁や「ですます体」で書かれているという外見とは裏腹に、その内容は学術書に近い。本書評の最大の価値は、そのような著作に挑んだチャレンジング精神にある。

挑戦の結果、評者が個人の変化を説明するためには、個人レベルの分析だけではなく、個人の行動を規定する社会システムに着目する重要性に気がついた点は高く評価されていい。しかし、本書の議論の中心は、「安定社会」から「信頼社会」へと変化していく日本において、今後、社会関係資本としての「信頼」の重要度が増すという点にある。本書評では、その点についての言及がなされていない。その意味において、評者の理解には不十分な点があると言わざるを得ない。

しかしながら、受賞者の中で唯一人学術書に挑んだという事実は賞賛に値する。今後も、その気持ちを失わず、様々な分野の専門書に挑戦してほしい。

受賞者から一言



今回はこのような素晴らしい賞をいただき、とても光栄に思っています。本を読み、考えをまとめ、相手に自分の思いがきちんと伝わるように書くという行為は、就職活動をはじめ、人生の様々な場面で役に立っていけると確信しています。これを読んでもくれた学生の皆さんにとっても、この書評コンテストがそういった機会になってくれることを願っています。



佳作

小倉 匡弘
おぐら まさひろ



書名：『おまけより割引してほしい
： 値ごろ感の経済心理学』

著者：徳田賢二

出版社・出版年：筑摩書房，2006

夕方6時を過ぎれば、スーパーではタイムサービスによる商品の割引が始まり、節約を心掛ける主婦や学生がこぞって集まりだす。元来、割引は「おまけ」の一種であり、「おまけ」は「御負け」といい、商品を割引くことや、割引の代わりに景品を付けること（以下、オマケ）を意味している。経営学の専門用語では割引は販売促進という、プロモーションの一種として分類される。割引やオマケと聞けばつい嬉しい気分になるだろう。割引にもオマケにも人を魅了する力がある。

人は誰しも何らかの価値を感じた際に商品を購入する。本書では、その感情を値ごろ感と定義し、ある商品に対して満足感という価値を見いだすことから始まる。ある商品（価値）に対してどれほどの価格（費用）であれば払うことができるかを考えた際に生じる感情（値ごろ感）を、数式（値ごろ感 = 価値 / 費用）を用いて分析している。値ごろ感は誰しも共通ではなく、個人によって値ごろ感の形成は様々である。また、店先での商品の陳列の仕方、他店との価格差、現在の懐具合、その日の気分など、その時々状況によって値ごろ感は絶えず変化している。

本書の構成は、前述した値ごろ感をもとに、吉野家、江崎グリコ、マクドナルドなどの事例を取り上げ、その商品のもつ値ごろ感の分析、ベストセラー商品である秘密、衝動買いやはしご買いからついで買いを誘発させる方法へと話を展開させていく。

筆者の考えでもある本書のタイトル「おまけより割引してほしい」という主張は、前述した数式で成り立つ。割引を行う場合、例えば、同じ500円の商品に対して100円の割引を行うとする。値ごろ感 = $500 / (500 - 100) = 1.25$ 。次にオマケを付ける場合では、500円の商品に100円のオマケを付けるとする。値ごろ感 = $(500 + 100) / 500 = 1.2$ となり、この数式ではオマケより割引の方が値ごろ感は高くなる。

確かに、割引は価格という目に見える費用を差し引いてくれるため実感しやすい。一方、オマケは支払った費用に対して付加される新たな価値であるため、その価値は個人の判断に委ねるしかない。オマケを煩わしく感じる消費者もいるだろう。

2007年3月に公正取引委員会で景品表示法の総付景品告示の一部改正により、購入者全員にオマケとして提供できる景品価格の上限が緩和された。商品の本体価格に対する景品価格の上限を1割から2割に引き上げたのである。これによって、消費者側としては従来のおまけからさらに品質の優れたオマケに期待したいと思う一方、企業側としてはどこまで既存商品のオマケ価格に上乗せできるか難しいところである。はっきり言えば、オマケに注ぐ費用を全て割引で引いてしまう手もある。値ごろ感の数式からすればその方が値ごろ感を得られる。

さらに、誰もがもつ不要な負担や損失を負いたくないという「損失回避」の思考があると筆者は言う。その欲求は、マズローの欲求階層説（生存を根底に、安全・社会・優越・自己実現へと欲求が移っていく）でいう下層に位置する安全欲求にあたるため、本能的に誰もがもつ基本欲求のひとつであり、意識はかなり根強いというのである。

そのため、実感しにくい価値を向上させるオマケの作成に財源を割り振るくらいなら、「損失回避」の思考に合わせ、実感できる負担を軽減させる割引に財源を割り振った方が効果的ということになる。

この場合、オマケに対する値ごろ感は価格からの視点であり、値ごろ感とはあくまで感覚でしかない。そのため、割引分を上回るだけの価値をオマケから感じるができるかが不明瞭なのも事実である。オマケはその場でしか手に入らない希少性を有していると考えられるなら、オマケの価値は価格だけでは定められない。オマケはその人が抱く価値観に委ねられるとされている。また、割引による価格競争の末路には利益が回収できないだけでなく、消費者が抱く参照価格を下げ、商品のライフサイクルまでも縮めてしまう恐れもあるだろう。

何に価値を感じ、いかに価値あるものだと感じさせるか。そこに企業の販売促進戦略がある。割引には割引の、オマケにはオマケの良さがある。それを判断するのは個人の価値観でしかないのだ。

本書の面白さは、時間・価格・心理の三つの側面から値ごろ感という消費者の抱く感情を単純な数式で解き明かそうとした点である。しかし、時間・価格の判断は容易だが、人の心理はそう簡単に解き明かすことができない。特に、本書でのオマケと割引について論点がやや明確ではないために、少し理解しづらい点もあった。それでも、日ごろ何気なく商品を購入していた私の購買行動を振り返り、オマケと割引について新たな知識をもたらしてくれた本書の「値ごろ感」は大きいものだったと言える。本書は、専門用語はそれほど使用されていないうえ、文中に説明がされており気兼ねなく読めるので、新たな知識を発見するために本書を手にとってみてはいかがだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 日渡 紀夫

本の内容を詳細でありながら要領よく伝えており、このことが選考委員の高い評価につながっている。それだけでなく、末尾にしかも簡潔ではあるものの、本書の趣旨を示し、批評を加え、本自体の「値ごろ感」は大きかったとの感想をもらし、推薦の言葉を述べており、書評としての体裁は整っている。ただ、筆者の主張や説明をあまりに分かりやすくテンポよく伝えているため、読み手に既に本を読んだような気持ちにさせてしまっている。このことは、対象図書を選択する能力が、読解力や表現力と同様かそれ以上に、大事である、ということを示している。

ともかく京都産業大学の図書館書評大賞の佳作にはふさわしい書評であった。

受賞者から一言



この度、佳作に選んで頂き有り難うございます。栄えある賞を頂き嬉しいです。この結果は、日頃からお世話になっている川又先生と一緒に勉強しているゼミ生の皆さんと頑張ってきた賜物であり、心より感謝しています。書評を通して多くの本と出会い、新しい知識を得る良き機会となりました。これからも多くの本との出会いを楽しみにしています。



佳作

かわむら しょうた
川村 翔太



書名：『アイデアの作り方』

著者：ジェームス・W・ヤング
今井茂雄 訳

出版社・出版年：TBS ブリタニカ，1988

(阪急コミュニケーションズ)

「書評『アイデアの作り方』」

「何か案はない?」と、現代においてアイデアを必要とされることは多い。今、多くの書店ではアイデアをいかに創出するか、といったいわゆる「アイデア本」が溢れている。特にこうした種の書籍の人気は高く、専門コーナーまで見受けられることもある。そして、それらの書籍の原点と言えるのが本書『アイデアの作り方』である。本書を手にとってまず驚くのが、その本の薄さにであろう。しかし、この100ページにも満たなく、そして1940年に初版という古い本でありながらも、それが流行の流れの早いこの種の書籍の中でも、現代まで残っているのは、本書が高い支持を得ているからであり、それだけの魅力が本書に詰まっている証左だと言えよう。

著者ジェームス・ウェブ・ヤングは1886年に生まれ、若いころからオフィス・ボーイやセールスマン、事務員や速記者など様々な職種の経験を積み、ある出会いをきっかけとして、広告代理店のコピーライターとして働くとその才能を開花させ、晩年には同社の常任最高顧問に就任するだけでなく、財団や協会、果ては政府関係の仕事まで深く関わり、1973年没後「広告の殿堂」に迎え入れられることになる。このように著者があまりにも輝かしいと言える人生を歩んだ秘訣は、全てこの本書の中に込められていると著者自身は述べている。繰り返すが、この100ページにも満たない本書に、である。

さて、本書ではまず最初からアイデアの作り方、つまりhow toを論ずるのではなく、著者自身の考えるアイデアの原理について述べられている。これは、著者が本書の中でも記すように、あらゆる方法を学ぶ前に、その原理を学ぶことが、大切だからである。確かに、これは何事にも通じることがある。例えば、方法やテクニックを熟知し駆使すれば、ある場合には成功を収めることが出来るかもしれない。しかし、それらの結果、もし失敗に終わったとしたらどうであろう。方法やテクニックの知識しかなければ、なぜ失敗したのかという原因に辿り着けない。つまり原理を把握するということは、常にその原点を見つめるために必要であり、著者はこれを「心の訓練」と呼び、その重要性を説いている。よってここでも、本書で記載されているアイデアの作り方の方法ではなく、その原理に焦点を当てたいと思う。

著者はアイデア作成の基礎となる2つの原理について語っている。まず一つ目が「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ」である。著者はこれを特にアイデア作成に関する最も大切な事実とし、本書の中では万華鏡を例に挙げながらこの原理を語っている。万華鏡はその中に入っている色ガラスの小片は同じものでも、それを廻すたび、違う位置関

係を生み出し、まったく新しい映像を生み出す。つまりアイデア作成も同様に、同じ要素でも、違う位置関係や組み合わせにすることで、新しいものを生み出すことができ、それがアイデアと呼ばれるのである。二つ目が「新しい組み合わせを作り出す才能は事実の関連性を見つけ出す才能によって高められる」である（この場合の「才能」は能力の意）。前述した新しい組み合わせを発見するためには、その関連性を見つけ出すことが重要であるということである。有効である組み合わせもあれば、逆効果である組み合わせもあるであろう。そうした関連性に着目し、さらにその原理を探ることで、より有効なアイデア作成を行うことができる。

一方、アイデアの作成の方法やテクニックについても少し述べておく。本書はその過程を5つの段階に分け、その手法について例を交えながら詳細に述べている。一つ例をあげると第一段階の「資料集め」では、カード索引法を紹介し、3×5インチのカードに情報をまとめる手法を提案している。これを用いることによって、集めた情報を視覚的に整理できるだけでなく、分類や抜き取り、組み合わせといった関連づけも促進されるというわけである。このように、本書で著者が語るアイデアの作り方は、取り立てて多大なコストや資質、能力が必要とされるものではない。一つ一つが、誰にでも地道な努力で出来ることである。

私たちはアイデアというによく「ひらめき」と理解しがちである。そして、そのひらめきの生まれる瞬間は、まさに突然天から降ってきたように起こるとも思われているであろう。しかし、そのアイデアを天からでなく、自身の中から生み出すことを可能にするために書かれたのが本書である。また、著者はアイデアを作成するために最も忌むべきは、視野狭窄に陥ることであると言う。何かを真剣に考えているときや必死になっているときは、意味のないことなどできないと考えるかもしれない。しかし、多くのことに視野を広げることが、アイデアを生み出す過程においていかに重要であるかは、様々な職歴を経験した、この本の著者自身の人生が物語っているのではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 箕輪 雅美

対象図書の骨子は、アイデアをつくるための2つの原理と5つの段階をもつ技術からなる。対象図書が80年近くもの間、読み継がれてきたのは、その原理の部分の秀逸さによるところが大きい。したがって「アイデアの作り方の方法ではなく、その原理に焦点を当てたい」という評者の方針は正しく、その紹介の仕方も適切である。またアイデアは地道な努力の積み重ねから生まれるという著者の基本思想もきちんと抑えられている。その意味において、これは優れた書評である。しかし問題がないわけではない。それは、評者が本書の原理や方法を「取り立てて多大なコストや資質、能力が必要とされるものではない」と捉えている点である。最初に著者が断っているように、ここで紹介されている原理や方法は、「説明は至極簡単だが実際にこれを実行するとなると最も困難な種類の知的労働が必要」なものなのである。評者が本書から「単純なことを地道に続けることこそが最も困難なことなのである」という人生の教訓を学んでいたら、さらに深みのある書評になったと思う。

受賞者から一言



第3回図書館書評大賞佳作を頂きありがとうございます。昨年から2回連続の入賞ということで喜びもまたひとしおです。お世話になっている川又先生と川又ゼミの皆さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。私は残念ながら今回で最後の参加となりますが、書評を書くことで得られた知恵を今後も活かしていきたいと思っております。



佳作

すぎもと みゆき
杉本 美幸



出版社の意向により、PDF 版には表紙イメージを掲載できません。

書名：『橋本治の古事記』

著者：橋本治[訳]

出版社・出版年：講談社，2001

今の大学生の何人が古事記の物語を知っているだろうか。

ギリシア神話やケルト神話は人気が高いのに対し、わが国の八百万の神々にまつわる話はあまり知られていないように思う。近代的な西欧諸国への憧れの延長かも知れないが、もう少し日本の神話にも目を向けてもいいのではないかとはいえ、古事記というとしても歴史書として捉えがちになり、内容も難しく、関心を持ってというのも無理なような気がする。

実際に、私も大学生になるまで上記の理由により古事記という書物に関心は無かった。だが、ふと興味を覚えて一般向けの本を探してみると、そこには原文となる古文があり、書き下し文があり、上段か下段に長い注が書かれていたりして読もうという気すら起きない。私のように古典に疎い者にとってそのような本は読書の対象ではなく、古典の教材である。純粋に物語としての古事記を読みたいのに、どうして教科書のような本が多いのか。少し考えると、古事記は日本最古の古典として扱われることが多いので無理も無いとわかるのだが、せっかく興味を覚えたのにこれでは興ざめである。一般向けの本を諦めようかとも思ったが、大学生にもなって子供用の本を読むのは気が引けた。諦めるに諦められず、本棚の本を抜いてページを開いてはすぐに閉じ、また本棚に返すという行為を繰り返していたとき、ついにこの本に出会った。そこには歴史書としての古事記ではなく、日本が誇る八百万の神々が織り成す不思議な神話の数々が私を待っていてくれたのである。

古事記は全三巻、上、中、下巻に分かれており、本書はそのうち上巻を現代語訳したものである。天地開闢に始まり、雨の岩屋戸、八岐大蛇退治、因幡の白兔、大国主命の国作り、国譲り、天孫降臨など、誰でも一度は耳にしたような神話が歌謡を含んで連なり、最後は神武天皇の東征で締めくくられている。そこには八百万の神々が恋をしたり、嫉妬したり、夫神が亡き妻神を追って死の国まで行くも怖くなって逃げ帰ったり、弟神の暴挙に怒り、姉神が引きこもってしまったりなど、私たち人間と何ら変わらぬ感情を持った神々が登場人物や主役として生き生きと描かれていた。ただ惜しいのはこのシリーズは上巻のみで、中、下巻が存在しないことであり、著者の橋本治氏にはぜひとも中、下巻の訳もしてほしいものである。

古事記初心者の私が神秘の世界に思いを馳せることができたのも、本書の文体によるところが大きいと私は思う。この本は先にも述べたとおり現代語訳で読みやすく、その上丁寧な言葉での語り口調で書かれているのである。ただの語り口調でないのは、登場人物である神に対する尊敬の意の表れであろう。ページを繰る毎に、目の前にはいない語り部が、幼いころに聞いたお伽噺を読者に話してくれているかのような感覚に陥る。この語り口調

こそが読者を夢幻の世界へと導く案内人となり、本書が持つ最大の美点である。他にもこの本には当然ながら原文となる古文も、書き下し文も、長い注も無い。日本の神にありがちな、当て字ゆえに難しい読み方をする彼らの名前は全てカタカナで表記されており、名前の読み方がわからずに前のページをめくり確認するという手間も無い。また巻末には、八百万とまではいかないが、登場する神々の簡単な説明が五十音順で引けるようになっており古事記初心者でも安心して読むことができる。

私が無知なだけかもしれないが、今まで見てきた古事記と名の付く本は語り口調ではなかったし、これほどまでに充実した付録も無かった。上級者には内容の言い回しが簡単すぎて物足りないかもしれないが、初心者にとっては重たい古文に振り回されること無く楽しめ、古事記の入門書となるだろう。

本書に巡り合って私は日本神話の魅力を垣間見た。古事記には、古人が後世の私たちのために伝え残してくれた日本を代表する物語が数多くあり、これを知らないでいたことを恥ずかしいと思うようになったのである。物語は語り継がなければ死んでしまう。それは古事記とて例外ではない。だが皆さんは、先に私が挙げた神話の中で、いくつのお話を他人にすることができるだろうか。八岐大蛇は正面からの一騎打ちで退治されたわけではなく、因幡の白兔はただの兔ではなかった。日本は島国であるが、最初に神々によって生み出された島はどこか、日本で最初に和歌を読んだのは誰か、天上の神の血を引く天皇が、何故人と同じ寿命を持つようになったか……。全ては日本の古い事を記した本、古事記に書かれている。興味を持たれた方はもちろんのこと、私と同じく興味があるが古典に疎く読むことをためらっている方にも、何の心配も無く気楽に読める本なのでぜひ一度読んでみることをお勧めする。古事記という物語を、私たちの代で終わらせないためにも。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 安田 和彦

古事記である。書評者の世代にとっては、それはまさしく「古典」であり、学校教育の過程で習うべくして習ってきたものだった。そして、いま再び、古事記を現代語訳で読んでみると、ああそうだったと思出す話も多く、確かに面白い。

大学生になるまで古事記に関心がなかったという書評者が、「本書に巡り合って私は日本神話の魅力を垣間見た。」と述べるのも、宜（むべ）なるかなである。また、最後の段落で、読者に物語の内容について問いかけをしている部分は、読者の興味を引きつけるには十分である。ただ、古事記がすべて「夢幻の世界」の物語なのかどうかは、少しばかり疑問だ。例えば、書評者は要約の中に取り上げていないのだが、ホデリの命が隼人族の先祖であるという話は、講評者にとっては、全くもって現実なのである。

書評者が、出会うべくして出会った古事記の世界をさらに深く進まれることを願っている。

受賞者から一言



去年は参加できなかったのですが、今年参加できてよかったです。まさか賞を頂けるとは思わなかったのですが、発表当日受賞のメールをみて驚きました。拙い文章ながら、精一杯やらせてもらい結果を残すことができ嬉しいです。来年もまた、参加させていただこうと考えております。本当にありがとうございました！！



佳作

鈴木 夏海



書名：『トトロの住む家』

著者：宮崎駿

和田久士 写真

出版社・出版年：朝日新聞社，1991

『トトロの住む家』というタイトルから分かるように、これは映画『となりのトトロ』を監督した宮崎駿氏が著した本です。宮崎氏の監督する映画は、そのストーリーもさることながら、映画の中にでてくる家々にも大変な魅力を感じる方も多いと思います。どの映画の家を見ても、懐かしさを感じたり、ワクワクさせてくれます。それは宮崎氏の家に対する執着心が生み出したものではないかと思えます。トトロが喜んで住みそうな懐かしい家を宮崎氏が直接訪れ記録する、というのがこの本のコンセプトであり、1991年の2月から8月の『月刊 Asahi』にて連載されたものを本にしたものです。宮崎氏を惹きつけた懐かしい家が、宮崎氏のイラストと写真家の和田久士氏の写真を交えて紹介されています。宮崎氏はイラストの中に、自分の好きなポイントをメモ書きしています。普通の人が見てもなんとも思わずに見過ごしてしまうようなもの 例えば木の窓枠であったり、縁の下の様子であったり、庭から溢れんばかりの緑であったり にいちいち感動している様子が見て取れて、新しい視点を与えてくれます。それもこの本の一つの楽しみだと思えます。

さて、家のジャンルもいろいろありますが、宮崎氏がこの企画を始めるとき、どんな家を訪れるのかは決められていませんでした。何が良い家なのか、彼の中で明確ではなかったのもありますが、敢えて定義しないことによって自分の好きなものに対して忠実になることができるのではないかという気持ちもあったのかと思えます。ただ赴くままに良い家だと思った家を訪ね歩き、そのうちに自分の好きなポイントが浮き彫りになっていくだろうという程度の意気込みだったと彼自身も語っています。

この本には東京の西郊、宮崎氏にとって身近な地域の家が6軒紹介されています。その家々にはいくつかの共通点があります。一つは昭和初期に建てられた家であることです。ところどころはがれたペンキや、柱の傷、植物の大きさなど、今真似しようにも真似できない雰囲気をかもしだしている家ばかりです。一朝一夕につくられたのではなく、その土地全体が同じ時間を過ごして、全体が調和して歳をとった感じが魅力なのだと思います。また良い家は時間の経過だけで作られるものでもありません。そこに住まう人々の息づかいというものも必要なのです。宮崎氏はその息づかいを生垣の外から感じられていたようで、自分が想像していた家主の人物像と、直接会ったときの印象とを綴っておられます。部屋は心の鏡とも言いますが、家も人の性格や心を写すもののようなのです。

最後に宮崎氏は興味を持てる家には闇のようなものがあると語っています。闇というのは一見暗くて怖いもののようにも思いますが、逆に言えばその先を自由に想像する余地

をもっているものでもあります。父の書斎の引き出しや、祖母の古ぼけたたんすなど、子供にとっては未知の領域が闇にあたり、子供時代にはその先を想像して楽しんだことが思い出されました。想像する余地については、宮崎氏のつくりだす映画にも大いに関係していると思います。私は、宮崎氏は続編をつくるのを嫌っているということを知ったことがあります。映画を見ている側からしたら、主人公はその後どうなったのかが非常に気になる場所であり、もし続編を出したとしたら人気ができること間違いなしだと思います。それでも頑なに続編を出さない理由は、宮崎氏が家に求める闇にあると思いました。先を想像する余地を残しているのです。この本は、宮崎氏の映画の解説本などではありませんが、お話がつくりだされる背景を垣間見ることができる本だと思います。

この本に出てくる家々は、年代によってはあまりにも日常的すぎて、憧れなど持たない方もいらっしゃるかと思います。私の母なんかそうであり、「こんなのおばあちゃんちそのものじゃない」と言っていました。新しいものがもてはやされる時代において、古さや不便さの中にある懐かしさを残すことが極めて難しくなっています。私は、この本を通して古臭いものの美しさにも目を向ける方が増えることを期待しています。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 箕輪 雅美

この本にかけた著者の思いが伝わってくるとともに、評者の瑞々しい感性が感じられる清々しい書評である。たぶん評者は、宮崎映画のファンなのであろう。そのため、本書評は、単なる書評の枠を超えて、映画監督宮崎駿評とも言うべきものに仕上がっている。特に家の闇がそこで育つ子供の想像力に多大な影響を与えるという著者の発言から、映画監督宮崎駿が続編をつくらない理由を推測するくだりは一読の価値がある。

ただ惜しむらくは、結論があまりにも月並みなことである。書評をする目的の一つは、読者の対象図書への興味を高め、読書へと導くことであろう。その意味において、結論が古いものを大切にしようという一般論では訴求力に欠ける。結論において、「本書を読むことは、宮崎映画がつくりだされる背景を垣間見ることなのだ」という評者独自の視点をさらに展開することができたら、より魅力的な書評になったと思う。

最後に講評者は、本書評に最高点を与えたことを付記する。

受賞者から一言



この度、私の作品を選んで下さってありがとうございます。何かに選ばれることから遠のいていた今日この頃……久しぶりに誇らしい気持ちになることができました。褒められると調子にのるタイプなので、調子にのって来年も応募してみようかな、なんて思っています。



佳作

瀬島 正大



書名：『ココロ』

著者：夏目漱石

出版社・出版年：岩波書店，1989

「過去」

我々はともすると過去を軽視しがちだ。

といってもそれは自身の経験 自らの生きてきた足跡だけでなく、それより外れた、いわば他人の踏み締めてきた道に対しても同様である。

自分の記憶から切り離された過去はさながら本のようなもので、私たちがそれらに触れるというのは誰その半生を綴った本の、あるいは歴史書だったりするようなものの頁を繰っていくという事だ。そこに連ねられた言葉は、今は無き過去を如実に語り、我々はそれをもって今を解し^{これから}未来を模索していく。だがそこには本人でしか汲み取れないであろう当時の感情や思惑が^{たゆと}揺蕩っているもので、それは単に言葉を交わすだけでは理解できない。

本書序盤～中盤にかけて語り部である「私」は、鎌倉の海で出会う「先生」に強い関心を寄せる。懇意になった後も奥さんと二人暮らしである「先生」宅へ足繁く通って、どこか厭世的で謎の多い「先生」の「人生」から教訓を得ようとする。「私」は「先生」の過去を、結果暴くという行為になってでさえも知ろうとするわけだが(もちろん本人の口から)これは小説『ココロ』の中核を成す、「先生」からの遺書という形をとって「私」の知るところとなってしまう。

私たちは過去の経験や知識・培ってきた人間関係を頼りに現在の自分というものを振舞っている。だがこれは、今ここにいる私たち個々人はその過去によって生かされている、ということでもある。言い換えれば、我々は過去に縛られざるをえないということだ。たとえば過ぎ去った事は気にしないなどという言葉もあるが、人は知らず知らずのうちに評価判断の材料として日常的に過去を参照している。もちろん人の世はその大半が日進月歩であるから比較対象が過去のそれになってしまうのは当然といえば当然なのだが、さまざま場面過去というものは影のように万物に寄り添っている。本書の登場人物らもその例外ではない。

本書において「先生」はその過去を語る遺書の中で、自身の生まれや書生時代の生活・その頃に抱いた恋とその顛末、そして当時の自分の行動がもとで親友「K」に起きた凄惨な出来事について触れている。現在の「先生」のどこか浮世離れた雰囲気や、妻すらも知らない月一度の墓参りの理由などはこの過去がもととなっていたのである。

「先生」は書生時代、下宿先の「奥さん」宅で「お嬢さん」ら二人との親交をきっかけに、その頑なでどこか人を疑る様子を和らげてゆき「お嬢さん」へ心を寄せるようにさえなる。後に同郷の友人であった寺の生まれの「K」が同居するようになり、ある日「K」が

ら「お嬢さん」への恋心を打ち明けられることで、物語は急転してゆく。友情をとるのが愛情をとるのが……。ありきたりな、などとナメてかかっではいけない。その細やかな心情・状況描写は現在あるそこらの小説と比べても群を抜き、とても90年以上前の作品とは思えないほどで、ぐいぐいと引き込まれてしまった。

過去というものは変えようが無いという点で美しくもあれば、何かと厄介で、気を病む要因の一つともなり得るものである。そしてそれをたとえ嫌でも思い出させる、象徴ともいべきものが様々な形をとって存在する。「先生」にとってはそれが「お嬢さん」であり、墓であり、過去から貫いて存在する、今のこの自分であったのではなからうか。

「私」が「先生」に求めたもの。「先生」が「私」に説いた理由。現在の「先生」が縛られていたもの。「先生」の奥さんが知らなかったこと。「K」に対して「先生」が突きつけたもの。頑然としてそこに佇む過去というものは我々の好奇の対象であり、戒めであり、また罪であり、未知なるものであり、そして自身を切り伏せる鋭利な刃たり得る。過去は多様なのだ。その捉え方は人それぞれであり、またそれ故の多様さであって、人と過去は限りなく緊密である。我々はより意識的にそれに向かい合ってゆくべきなのだ。

教訓としてならば過去を顧みるべきはなにも人間関係にとどまらない。昨今問題となっている環境問題などその典型だが、犯罪、医療、政治、製造。あげれば切りが無からう。人が間違いを起こさなくなる日はおそらく来ない。またその一方で過去は我々を見つめ続けている。戒めと共にこれからに期待しているのだろうか。その期待に応えてゆくことが、今を生きる我々に課された使命といえるのではないか。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 日渡 紀夫

書評のタイトル通り「過去」という視点で冒頭から末尾まで批評を貫徹しており、そのことが選考委員の高い評価につながっている。

あらすじについても各所で伝えているが、随所で「過去」と「現在」の連続性や「過去」のイメージについて論を堂々と展開しており、結びでは読み手に問題を提起をしていた。このため、『こころ』という小説の書評であることを忘れて、「過去」についての懸賞論文として読んでしまうかもしれない。これも、「我々」とか「私たち」といった表現のせい、それとも、ありきたりのテーマでさえも読み手に考えさせ語らせてしまう対象図書（夏目漱石）の力のせい。

ともかく京都産業大学の図書館書評大賞の佳作にはふさわしい書評であった。

受賞者から一言



また入賞する事ができ大変嬉しく思っています。『こころ』は中学（高校？）の教科書で一部読んでいたので懐かしかったです(笑)

前は理系っぽい本をチョイスしたんですが、今回はあえて文学作品の書評にチャレンジしてみました。終えてみての感想ですけど、やっぱり科学でも文学でも、本を読んで自分なりに考察を重ねるのは楽しいです。



佳作

中村 優美



書名：『京都読書空間』

出版社・出版年：光村推古書院，2005

「京都で読書空間を探す」

「京都」が注目されている。春夏秋冬、全ての季節を各々楽しむことが出来る京都の魅力を紹介する特集記事を含んだ本は、後を絶たずに本屋に出回っている。それだけではない。最近の記事で特集されるだけでなく、「京都」を題材のベースとした「京都本」と呼ばれる本がたくさん発行されている。有名なものでは雑誌『Meets』で特別号として出版される「京都本」。また、文庫本サイズのものであれば「らくたび文庫」では京都の料理や神社、お菓子など、テーマに分けて京都を紹介する本が何冊も出ている。

『京都読書空間』は、まさにそんな京都ブームから生まれたといっても過言ではない、京都の素敵で落ち着いて本が読める読書する空間を紹介した本である。ページの8割はカラーの写真・イラスト付きの文章で構成されており、鞆に入れて持ち運びしやすいA6サイズ。紹介されている場所は「空間」というだけあって、様々な場所にスポットを当てている。知っている人は少ないと思うが、京都にはbook cafeやbook barといったお客さんに本を読んでもらうことをコンセプトとしたカフェや、お酒を片手に本を読むバーなどがいくつも存在する。この本で紹介されている「図書館」というバーも、夜中まで営業しているが、客の目的は落ち着いた空間で本を読むことであるため、終始静かな空間が広がっている。少し前に「お一人様」という言葉が世の中に流行し、一人で旅をしたり、一人でご飯を食べに行ったりするので流行った時期があったが、これらのカフェやバーは、お一人様こそ歓迎してくれる空間であることは間違いない。人と話しながら本を読む人はなかなかいない。本は没頭し、読みふけり、入り込んでこそその本の世界を経験できる。これらの店には、店の店長が集めた本が店内に並び、ドリンク代は席料のようなものになる。並んだ本からは店の趣きや心遣いなどが感じられる本が並んでいる。自分でその中からチョイスするのも楽しい。その本を、もしくは自らが持ち込んだ本をゆっくりと読むことが出来る空間がたくさん紹介されているのが、この『京都読書空間』である。

そのほかにも図書館や古本屋、雑誌やCDなどと本とを一緒に店に並べるような一風変わった本屋なども紹介されている。京都には一般に開放されている図書館がたくさんあり、大学の図書館もその大学の学生以外の一般への開放に積極的に取り組んでいる。この本の中で紹介されている京都精華大学情報館は約22万冊の蔵書のうち、90%を開架している。この開架の割合は他の大学の図書館に比べてはるかに高い。近年設立されたマンガ学部もあるため、コミックだけでも約3万冊揃っている。最近京都烏丸御池付近に出来た「京都

国際マンガミュージアム」は、京都市と京都精華大学の共同事業であり、500円で一日中館内のマンガ全てが読み放題というサービスを行っている。この本が発行された後に出来た施設なので文中には紹介されていないが、読書空間としては格好の場所だと推奨できる。ガケ書房、恵文社などは、CDや雑貨と一緒に本を並べることで殺風景な直線のイメージを取り払い、多くの客層をターゲットにしている本屋である。多くの音楽や雑貨に囲まれる癒しの読書空間を提案している。

この本は、京都には店や建物のほかにもたくさんの読書空間が隠れていることも教えてくれる。本にまつわるコラムが店の紹介の合間に載っているのだが、そこでは賀茂川沿いのベンチや哲学の道など、落ち着いて本が読める静かな空間が紹介されている。紹介されている全ての店の地図がページの最後に記載されているのも、便利で嬉しい。

京都は碁盤の目のようにまっすぐな道が敷かれており、とてもわかりやすい。京都は何故か、車やバイクなどの排気ガスを出しながら走る乗り物よりも、自転車で走ったりぶらりと散歩するのが似合う。ゲームや大都市にあるようなスクリーンの画像よりも、文学的なものが似合うのは何故だろう。その答えは、京都が古来大切にしてきた歴史の面影が、今も大切に残されているからではないだろうか。たくさんの優れた文学作品が生まれてきたこの街は、今も私達に学ぶことの大切さと自分の無知さを教えてくれるような気がする。京都で生活の大半を過ごすようになってから、たくさんの本を読むようになった。お気に入りの場所で、自分しか知らない安らげる空間で、静かに本の世界に入る悦楽感にはたまらないものがある。この本を通じ、自分の読書空間を見つけて欲しい。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 安田 和彦

近頃耳にした話だが、若い世代の多くは携帯電話の画面で小説を読んでいるという。私の世代の多くは、それは無理ではないだろうが、きっと難しいことだろうと思う。私も、読むなら、本を、書を読みたい。それに、携帯の画面を読むのは似合わないだろう。

書評者はどうなのだろう。書を読むのも、画面を読むのも、どちらも似合う世代なのだろうか。

いずれにせよ、この京都には読書にこそふさわしい空間がたくさんある。良き書と出会い、共に過ごす時間は楽しい。書評者は、ひととき、京都で書を読んで過ごしたいと思わせてくれる対象図書の魅力を簡潔に伝えている。

ただ、一部だが、固有名詞の表記に誤りが見られ、意図が伝わりにくい表現が見られることが惜しまれる。また、「ページの8割」を占めるという写真やイラストについても、何かコメントがあってもよかったのではないだろうか。

受賞者から一言



ステキな賞をありがとうございました。

応募するにあたりどんな本でもいいと聞き、本を読む楽しさを伝えられればと思い、迷わず私が大好きなこの本について書きました。

活字離れが進む中ですが、学生の街京都にはたくさんの読書に適した空間が在ります。お気に入りの本とお気に入りの場所を見つけて、たまにはゆっくり本の世界に入りこんでみませんか？



佳作

もりしま しほ
森島 志帆



書名：『西の魔女が死んだ』

著者：梨木香歩

出版社・出版年：新潮社，2001

「梨木香歩が書く世界」

この物語は、主におばあちゃんと孫の「まい」のやり取りが描かれている。物語は主人公「まい」が学校に行けなくなり、外国人である母方のおばあちゃんの家でしばらく過ごすというもの。挫けたまいの心が癒されていく、というよりは強く、柔らかくなっていく。おばあちゃんの魔女修行によって。

「魔女」と聞いて思い描くものは、人里離れた森の奥に住んでいて、箒に乗って空を飛んだり、大鍋でぐつぐつ怪しげなものを煮たり、呪文を唱えるだけでなんでも思い通りにすることができる、そんな現実離れした力をもった人のことを思い浮かべる。まいも、それとはちょっと違うけれど、特別な力を持った魔女になれると思って修行を開始した。しかし、おばあちゃんの言う「魔女」は、まいの言う魔女とは違う。だが、このおばあちゃん、実に、まいの言う魔女らしい。田舎に住んでいて、大きな鍋でジャムを作る。ハーブや草、花の名前に詳しいのも、おばあちゃんの知恵袋というよりも、魔女の知識として捉えてしまう。まいが「おばあちゃん、大好き」というと、「アイ・ノウ」という呪文で全てを優しく包み込んでしまう。そして極めつけは、おばあちゃんの笑い方にある。「にやり」と笑うのだ。ここで、「にっこり」笑ってしまうとただの優しいおばあちゃんだ。「にやり」と笑うから、おばあちゃんは魔女になる。

「にやり」と笑うのは、悪巧みをした時や、不敵に笑う時に使う笑い方だ。なんだかいいイメージではない。それでも、おばあちゃんに悪いイメージは抱かない。それがこの著者のすごいところで、汚いものすら綺麗に表現してしまうのだ。また、醜いもの・嫌悪を抱くものと、美しいもの・好意を抱くものを同時に書いている。どちらか一つに偏るものではなく、どちらも同時に存在している。表裏一体なのだ。『エンジェルエンジェルエンジェル』『りかさん』という著者の他の作品も読んだが、どの作品にも、その点が共通していた。まいの中でも、汚いものが綺麗なものに変わったり、逆に綺麗だと思っていたものが実は汚いものだったと知って、裏切られた気分になったりする。それらの変化は徐々にではなく、ふとした瞬間・一言で、何の前触れも無く突然やってくる。著者が書く世界には、汚いものと綺麗なものが混在している。でも、それこそがありのままの姿なのだ。

だからこそ、「魔女修行」が必要になる。おばあちゃんが言うには、「魔女になるためにいちばん大切なのは自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力。そして、上等な魔女は外部からの刺激に反応する度合いが低いのです。心から見たい、聞きたいと願った

ものを見て、願わないものが現れても無視しなさい。振り回されるだけです。」要は生きていく上での処世術みたいなものを、おばあちゃんは魔女修行と呼んでいる。例えば、こういふこと。本書から引用すると、「ジャムの匂いにひかれてか、蠅もずいぶん集まってきたけれど、さわやかな乾いた風が時折吹き抜けるので、あまり気にならなかった。」まいは、汚い蠅を無視している。しかし、蠅は汚いものだが、ジャムのいい匂いを引き立てるものでもある。

物事は色々な面を持っている。汚い部分もあるけど、綺麗な部分だってある。それは、人の見方・捉え方によっても見える面が違うから、見えている世界の広さが違うから、そう感じる。しかし、どのような面があったとしても、それらは全部でひとつなのだ。

さて、ここまでおばあちゃんとまいの魔女修行について述べてきたが、一旦本書のタイトルに意識を戻していただきたい。西の魔女が「死んだ」のだ。西の魔女とは、もちろんおばあちゃんのことだ。この物語の最大の見所は西の魔女の死後にある。しかし、物語の大部分は西の魔女の生きている時を描いている。でも、どうしてもなく惹きつけられるのは、ほんの数ページしかない西の魔女の死後なのだ。もっと言えば、最後の2ページのために、いや、たった一言のために、死までの出来事が描かれている。西の魔女がまだ生きている時、まいは尋ねる。「人は死んだらどうなるの。」その答えは西の魔女の死後、明らかになる。そこは読んでみてのお楽しみだ。

最後に、「アイ・ノウ」の他にも、「ナイ、ナイ、スウィーティ」など、英語をわざわざカタカナで表記している。これを英語で書いてしまうと“ I know. ”ただそういう言語になってしまうが、カタカナになると何か特別な響きのある、魔女の呪文のようになる。しかし、実は「アイ・ノウ」という時のおばあちゃんは微笑んでいる。「にやり」とは笑っていないのだ。是非、おばあちゃんの笑い方にも注目して読んでみて欲しい。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 藤井 宏

梨木香歩のこのファンタジー、クランクインして来年には映画が公開されるという。梨木の描く西の魔女ことおばあちゃんはガーデンでハーブや野菜を育て、花を咲かせる。おばあちゃんの生活からは19世紀のイングランドの田園のコテージの哲学が微かに香ってくるようです。

主演のサチ・パーカーが言っているように「本当は『魔女』の話ではなく、人が自立していくためのレッスンです。どっしり落ちついて孫娘の迷いを解きほぐしてあげる。すてきなおばあちゃん」の話なんです。

この西の魔女の物語を紹介してゆく書評者の文章も、ただし書評者の解釈にはいくつも異論があるのですが、読者を誘うやさしさがあってよかったですね。

受賞者から一言



今回、初めて書評を書くことを意識して、好きな本を改めて読み直してみました。すると、文字ならではの細かい表現があることに初めて気付きました。この言葉を選んでいたからこそ、すんなりと映像をイメージできていたんだなあ、と。いつもとは違った視点で読めて、おもしろかったです。このような機会をくれた書評大賞に感謝します。



佳作

矢島 美緒



書名：『きらきらひかる』

著者：江國香織

出版社・出版年：新潮社，1994

「失いたくないものをもってしまうこわさ」

普段日常でそうならないよう気をつけているつもりでも、人を好きになってしまうことは多々ある。誰かを好きになり、それを自身で感じることによって、孤独の淵から救い出されたような気分になる。しかし同時に、その人を失うことを考えた途端、どうしようもない絶望の感が襲ってくる。著者の江國香織はこの作品を「基本的でごくシンプルな恋愛小説」と語っているが、実際はアル中の妻とホモの夫の話であり、夫には男の恋人がいて、妻もそれを理解したうえで結婚に踏み切っている。これがどうして「基本的でごくシンプルな恋愛小説」なのだろうか。お世辞にも普通とは言えない。寧ろ異常ですらある。ではなぜ著者はこういった解釈をしているのか。それはこの一見奇妙でしかない物語を読みすすめていく内に、次第に理解していくことになる。

いわゆる一人称形式で話は展開していくのだが、この小説が他のものに比べて変わった印象を受けるのは、語り手が妻と夫で交互になっているからではないだろうか。奇数章は妻の笑子が、偶数章は夫の睦月が語るという形をとっている。この形式にすることにより読み手は、妻からは普段垣間見えない夫の感情、または夫が知ることはないであろう妻の心情を汲み取ることができ、よりリアルに物語に溶け込むことができる。

笑子のように、普段から人を好きにならないよう、じゅうぶん気をつけていた人間が、なぜ睦月のような、決して自分には振り向かないと分かっている人間を選んだのか。笑子は以前に大きな失恋をしており、そのときに初めて「思いがけなくどうしても失いたくない人を失う」という経験をした。もうこんな経験は二度とごめんだと、一度は人を好きになることの残酷さを知るのだが、その後の見合いで同性愛者である睦月 決して失う恐れのない相手 に出会い、結婚を決めたのである。「こういう結婚があってもいいはずだ、と思った。なんにも求めない、なんにも望まない。なんにもなくさない、なんにもこわくない」と。

けれども睦月と一緒に暮らしていくうちに、笑子は再び「どうしても失いたくないもの」をもってしまうのである。そういう人を持たないために、もう自分を傷つけないために、あえて同性愛者の睦月を選んだはずだったのに。

一方で夫の睦月が結婚を決めた理由は、平たく言えば親からの強いすすめであったが、恋人との関係を守りつつ、自身が同性愛者だということに対する世間体や、それをしきりに気にする母親との折り合いをつけるためには、この結婚が最善の策であったことも主な

理由のひとつとして挙げられる。いわば自己防衛の末の結婚である。決して笑子を女性として愛せると思って付き合い始め、結婚したわけではない。現に恋人とも別れていないし、自分は何もしてあげられないからといって、笑子に恋人を持つようにすすめている。ただ、人間として笑子を好きになった睦月と、失う危険のない男性を欲していた笑子がうまく調和したのである。

しかし二人はこの結婚に満足しているものの、周りからの圧力によって追いつめられていく。笑子はどんどん鬱になっていく傍ら、睦月の恋人、紺とも仲良くなる。これについては、睦月を失わないようにするための最終手段としてとった行動と思われるが、それは笑子が計算して紺と精神的な結びつきを得ようとしているのではなく、純粋な人間の本能でそう行動しているからである。作中で紺と笑子が二人で過ごしている場面が複数見られるが、決してそのようなどろどろしたものは感じられない。笑子は、このままでいること、睦月と身体的な関係はなくとも穏やかに暮らし、睦月は紺との関係を続け、紺と笑子も睦月を好きな二人同士、仲良く暮らしていくことを望んでいる。しかし、周りがそれを許さないのである。次第に追いつめられていった笑子がとった行動は他人が聞くと信じられないようなものであったが、その考えは笑子の「三人でしあわせに暮らしたい」という、どこまでも正直でどこまでもまっさらな思いにあふれていて、こんな複雑な話なのに、さわやかさすら覚える。

三人が三人とも、追いつめられていっているはずなのにもかかわらず、三人でいるとき、どこかほのぼのとした感じがする。こういった不幸な中での幸福な雰囲気への描き方が、この作品の、そして著者・江國香織の魅力であるのだと思う。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 藤井 宏

文学作品をどのように読むのか、決まりがあるわけではありません。それはあなたや君の人生、経験や感性によってくるものだからね。「男」と「女」の愛の形、いや男と女の間に限ることはないヒトとヒトとのコミュニケーションの形は一つではない。批評者が「異常」と述べる、外見上からはまさに marriage of convenience “政略”結婚と見えるお話を江国が「基本的でごくシンプルな恋愛小説」と語っているのは、彼女のはっきりとした思いがあるわけで、「異常」っておかしいよね、こんなにシンプルで純粋な関係もあるじゃない……、といているように聞こえます。

書評者はこの作品を、3人の関係をストーリーを中心として紹介しています。しかしこのストーリーは、江国によって作りこまれた“状況”にすぎない。むしろ、作品中の細部の描写、女の心の微妙な揺らぎの記述のおもしろさ、壁にかけてある水彩のセザンヌに向かってうたっている女、鉢植えの木に紅茶をあげる主人公の姿に講評者はこの作品の面白さをみました。

受賞者から一言



この度は大変名誉ある賞を頂き、大変喜ばしく存じます。まさか私の拙い文章で入選できるなどとは思いませんでしたので、未だに受賞したという事実には驚きばかりです。

今回審査をしてくださった方々と、応募を薦めてくださった大室先生には感謝してもしきれないほどです。本当に有難うございました。これからも日々精進し、読書に励もうと思います。

第3回書評大賞アンケートから

書評の応募と同時にアンケートに回答いただきました。ご意見・ご協力ありがとうございました。みなさんのご意見は次年度の書評大賞実施の参考にさせていただきます。



応募者の声をどうぞ。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

「昨年も応募したから」「大学時代の思い出の一つにできたらと思い応募させていただきました」「図書館を利用したときに図書館書評大賞の紙が掲示されていたので、興味を持ち応募しました」「文章を書くということが苦手なので今後のためにも良い経験になると思ったからです」「夏休みを充実させるために応募しようと思いました」「大学生活で初めての夏休みになにか挑戦をしたいと思っていたところ、この大賞の案内を見つけたので」「自分の書きたいことがある」「良い本を読んだ証として何か形に残したかったから」「就活の前にはできることをなんでも挑戦したかったから」「図書券で新しい本を買いたいから」など。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

先生からの推薦・指示 (79人)

図書館で見つけたから (34人)

興味のある分野だから (52人)

話題の本だから (4人)

好きな作家だから (27人)

その他

(その他の内訳)「以前から好きな本だからです」「映画でアフリカの民族紛争に興味があったから」など。



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(理由)

「文章を書く練習になった」「自分の文章力のなさを痛感したので、次も機会があれば挑戦したいです」「次は指定された本ではなく自分で選んだ本で応募したいから」「なんとなくではなく、意識的に内容を読み取る姿勢が身につくように感じたからです」「本を読むのが好きだから」「自分の読んだ本について深く考える機会ができるから」「本を読んでたくさんのことを学べ、それをみんなにも分かってもらいたいの」「書くことはしんどいが、楽しさもあると思ったから」「自分の書いた文章を人に評価してもらいたい機会だから」「自分の文章力を試す機会になった。好きな本をアピールするチャンスだと思った」「興味があるから」など。

「いいえ。」(理由)

「大変だったから」「書き方がなかなかわからない」「文章を考えるのは苦手なので」「うまくまとめることができないからです」「本をあまり読まないため」「今年度で卒業するため」「同じことより違うことにチャレンジしたいから」など。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出時期、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

感想

「執筆中の言葉を選んでいく作業が、難しくもあり楽しくも感じました」「難しかったですがやりがいもありました」「書評することで読書感想文とは違い、自分が普段気づかない事にも多く気づいた」「書評を書くことでより深く本を楽しめた」「普通の感想文にはならないよう気をつけなければならないところが大変でした」「本の内容を簡潔に紹介することは思っていた以上に難しかった。辞書を引きながら書いてみたが、思うように表現できなくて苦労した」「私は、今回の書評大賞で初めて本を借りました。「本っていいですね」今回書評大賞に応募したことで、このような考えを持つようになりました」「思ったよりスラスラかけた」など。

対象図書について

「対象図書の範囲を広げても良いかと思います」など。

提出方法について

「提出方法がメールだととても便利だと思いました」「家でも提出できるから、便利だと思います」「ワードによる提出なので書き終えた後の添削がしやすかったです」「メールによる提出のためパソコンを持っていない人は参加しづらいと思う」「送信の仕方がよくわからなかった」「この所定のフォームを探すのに苦労した」「ワードでの提出方法は手書きと違って楽なので嬉しいです」など。

文字数について

「1600字以上というのは少し多すぎるかなと思いました」「文字数にもっと幅がほしい」など。

広報について

「サギタリウスを読んで今回初めてこのような賞があることを知りました。もう少し大きくPRして欲しかったです」など。

Q5) 6月に「書評大賞講演会」が開催されました。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

「今後も売れっ子と呼ばば、本を読む学生が減る一方の中でも挽回できるのではないのでしょうか」「期待する内容は書く楽しさ、しんどさをきいてみたい」「森博嗣」「東京タワーの作家、リリーフランキーさん」「養老孟司先生の考え方に興味があるので来ていただけるのならうれしいです」「椎名誠さんの講演会をしてほしいです」「小説家や作家以外に、記者の方のお話にも少し興味があります」「水谷先生」「横山秀夫さん」「作家 重松清の講演会」「高田崇史」「吉田修一さんを読んで欲しい」「北杜夫・山田詠美」「講演会とは違うのですが、受賞者の座談会などあったらよいのではないのでしょうか？」など。

Q: どの本で書くか、迷ってしまいます。



A: グレート・ブックス・コーナー(2階)へ行ってみよう。
下記の本 URL、雑誌を参考にしよう。

・大学新生に薦める 101 冊の本 / 広島大学総合科学部 101 冊の本プロジェクト編。
-- 岩波書店, 2005. 2 階 019.9||HIR

約 2,000 点の重要な書物のなかから絞り込まれた 101 冊。見開き 2 頁の体裁で、本について四分之三、「著者とその時代背景」に四分之一の文字数をあて、類書や反論の書についても紹介がある。難易度が の数で示されている。第五章に「本の買い方選び方」があり、本の情報の入手のしかたがわかる。テレビ書評番組「週刊ブックレビュー」の紹介もある。

・東大教師が新生にすすめる本 / 文藝春秋編。 -- 文藝春秋, 2004. (文春新書 ; 368) 2 階 019.9||BUN

雑誌『UP』(ゆうぴい) 4 月号に掲載された 1994 年から 2003 年までのアンケートを再構成したもの。180 人の著者によって 1500 余冊を紹介。『UP』は、図書館 2 階出版社広報誌コーナーにあり。

・教養のためのブックガイド / 小林康夫, 山本泰編。 -- 東京大学出版会, 2005 2 階 019.9||KOB

「大学生を中心とした若い人に、たとえば授業で教科書や参考書として指定される本以外に できるだけたくさんの、さまざまな種類の『よい本』を読んでもらいたいという望み」のもとに編集された。東京大学大学院総合文化研究科の教員らが執筆した。

・千葉大学教員の選んだ 100 冊

<http://www.ll.chiba-u.ac.jp/100bs/>

平成 7 年 3 月、千葉大学図書館発行の冊子をオンライン化したもの(一部未収録)。

・西洋文学この百冊 / 京都大学文学部西洋文化学系編 <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/wl/>

西洋文化学系教官が、新生に西洋の文学に親んでもらうための指針として、推薦図書を決め、100 字あまりの紹介文をつけた。「文学全集が姿を消し、文庫の種類ばかりが

徒に増えた今日、どこへ行けば上質の文学に会えるかが分かりにくいという状況」で「若い人たちに広く古今の名作に親しんでもらいたい」と編集された。

・17 歳のための読書案内 / 筑摩書房編集部編。 -- 筑摩書房, 2007. (ちくま文庫 ; [ち-10-1]) 2 階 文庫 019.5||TIK

作家、研究者、評論家など各界で活躍する約五十人が、古今東西の名著、知られざる傑作、今こそ読みなおされるべき作品を自身の読書経験を交えながら紹介する。

・私の選んだ文庫ベスト 3 / 丸谷オ一編。 -- 早川書房, 1997. (ハヤカワ文庫 ; JA589) 2 階 文庫 019.1||MAR

「本好きで知られる諸家百数十人がそれぞれの最良の本や偏愛の書を公にして(ただし、文庫化されていることを条件として)その思うところを語った短い文章を集成したもので「これは私のほれこんだ本なのだという気迫のこもった文章が過半を占めている」。(同書より)

・私が本当に伝えたいこの一冊 / 日本経済新聞社編。 -- 日本経済新聞社, 2005. (半歩遅れの読書術 ; 2)

2 階 019.9||NIH||2

2004 年 4 月から 2005 年 3 月に日経新聞読書欄に連載された「半歩遅れの読書術」を収録。作家や学者、建築家など三十人が自らの読書経験とともに本を紹介する。巻末に執筆者紹介と紹介図書索引がある。姉妹編に『私のとっておきの愉しみかた』がある。

・みすず(みすず書房) 2 階 出版社広報誌コーナー(新聞架の隣)

1 月・2 月合併号(2 月 1 日発行)には「読書アンケート特集」が載る。新刊・旧刊を問わず、昨年出合った印象的な本について、さまざまな視点からの「ブック・レビュー」を読むことができる。

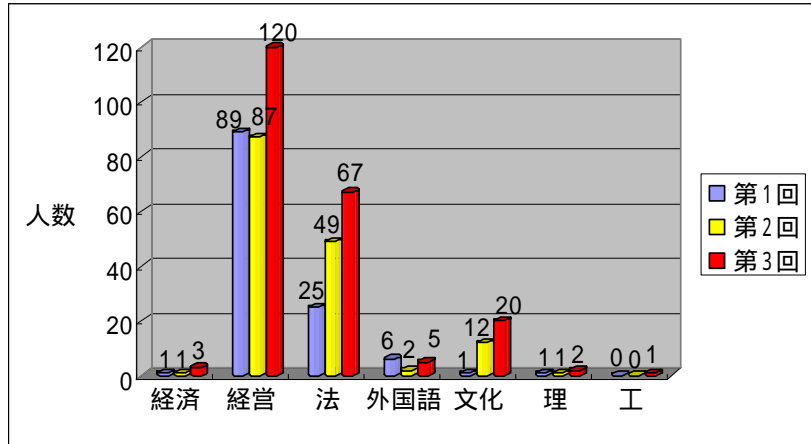
第3回京都産業大学図書館書評大賞 統計

1. 学部別応募者数

第1回から連続して経営学部の学生が最も多くなっています。続いて法学部、文化学部という応募状況は前回と変わっていません。応募時のアンケートによると、これらの学部ではゼミの先生の勧めによって書評執筆に取り組んでいるケースが多いようです。

入賞者もこれらの学部から多く出ていますが、応募者数と比例しているわけではありません。

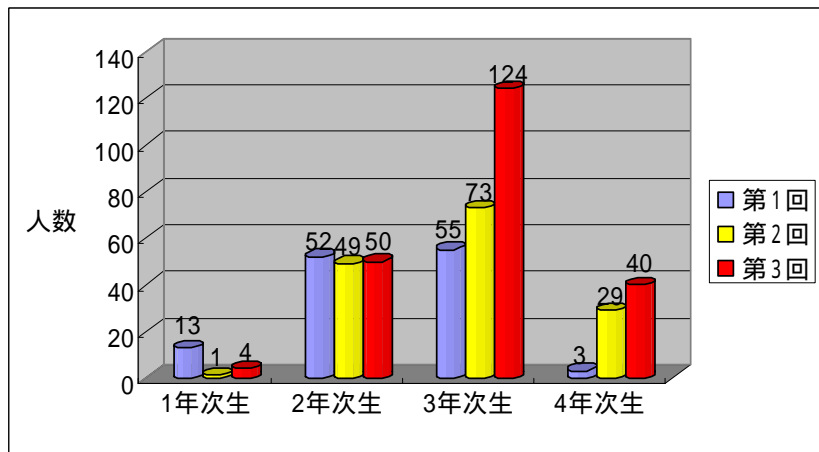
今回初めて工学部から応募者があり、全学部から応募を得ることができました。



2. 学年別応募者数

3年次生が大幅に増加し、4年次生はやや増加しました。2年次生は例年とほぼ同じ応募者数(50名)をキープし、2番目に多い状況です。これらは、ゼミで取り組んでいるという状況がそのまま反映しているようです。

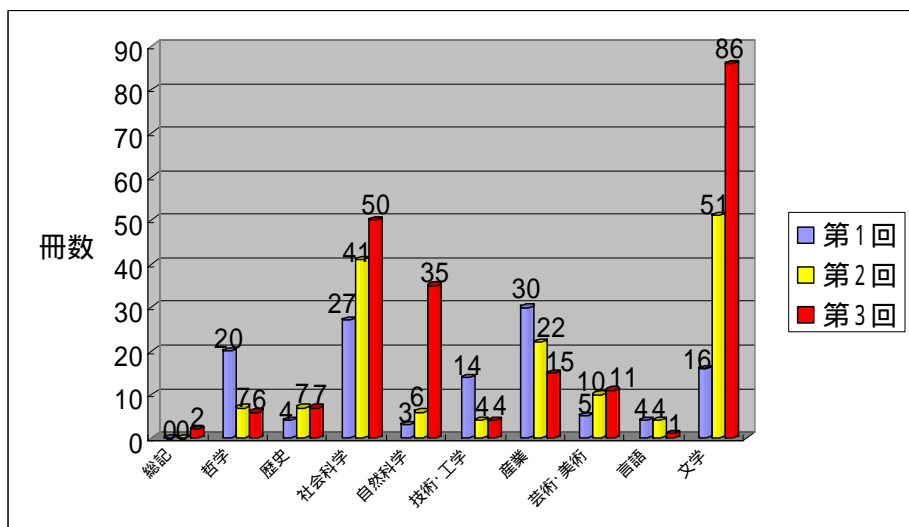
1年次生の応募が昨年に続き少なかったことは残念ですが、書くことを勧めてくれる人がいなかったり、書評大賞が行われていること自体を知らなかったりといったこともあるかもしれません。次年度以降は、これまで以上に広報していきたいと思います。



3. 対象図書の分野別冊数

前回までは社会科学や産業といった分野の専門書・実用書が多かったのですが、前回応募数を大きく伸ばした文学がさらに伸びています。

また、応募総数は218篇ですが対象となったタイトル数は166点でした。これは1タイトルについて複数人から応募されたケースが何件あったからです。ここからゼミで課題図書が指定されていることが窺えます。



なお、応募件数が最も多かったのは自然科学分野の『「旭山動物園」革命：夢を実現した復活プロジェクト』で、29篇の応募がありました。

京都産業大学図書館書評大賞 概要

応募要領（抜粋）

1. 目的

- (1)学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2)興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

2. 応募資格 京都産業大学の学生。ただし大学院学生を除く。

3. 応募要件

- (1)本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2)文字数：1篇につき1,600字～2,000字以内。ワープロ原稿に限る。マイクロソフト社のWordを使用すること。
- (3)応募作品は本人のオリジナルであること。
- (4)その他：1人複数篇の応募可。ただし受賞は1人1篇。応募作品の使用権は京都産業大学に帰属する。

応募総数

201名218篇

実施日程

応募期間 平成19年 6月 1日(金)～ 9月30日(日)24時
選考期間 平成19年10月 1日(月)～11月 9日(金)
入賞発表 平成19年11月28日(水)
表彰式 平成19年12月14日(金)

選考委員より 一言

例年以上に応募作が多かった上、力作揃いで、委員一同、選考過程ではうれしい悲鳴を上げ続けていました。ただ、社会科学の専門書や理系の文献を対象とした書評がほとんどなかったことが少し残念です。今後は、臆せずに學術書に挑む学生が多く現れるといいなあ！（箕輪先生）

日常の読書とは全くちがう世界にしばらくだけ招いてもらったようでいい経験でした。（藤井先生）

本を読むことで、昔の人の考えに触れたり、登場人物になったつもりで、物語のなかで活躍することもできます。現実世界を生きることも大切ですが、本を通じて、想像したり、悩んだり、ヒントをもらったりして欲しいですね。（真部）

課題として書いた（書かされた？）と思われる書評が（と明記した書評も！）目につきました。この大賞の目的に反しますから、このような課題を出す教員に、再考を促します。（日渡先生）

普段自分では決して選ばないような本の書評を読む機会となり、選考は大変でもあり面白くもある経験となりました。受賞した作品のなかには「うまいなあ」と思わせてくれるものもあり、今後も「書くこと」を続けてもらえたらよいと思います。（天笠）

すべての読書は書評に通ず。書評大賞への応募が、大切な1冊と出会うきっかけになれば嬉しいです。（中上）

この仕事をしているからには、本を読むのは日常的に当然のこと、なのですが、近頃は専門分野以外の本を読んでいないことを思い知らされました。（安田先生）

書評を読んで、同じ本を読んだ書評者と会って話をしたくなるかもしれません。友達どうし、アフター・リーディング・ディスカッションをすると楽しいと思います。（近江）

